

千葉県八千代市

# 平戸道地遺跡

—農業道路敷設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1986

八千代市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、千葉県八千代市平戸字道地191（代表地番）における八千代市土地基盤整備事業（新農業構造改善事業）に関連する道路敷設及び送水管埋設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

1970 千葉県教育委員会 「千葉県記念物所在地図」 遺跡番号933 道地遺跡

1983.3八千代市教育委員会 「八千代の遺跡－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書一」 遺跡No18 道地遺跡

2. 調査は、発掘を昭和58年1月7日より同年2月13日まで行った。遺物整理は昭和58年2月14日より昭和59年3月31までの期間に断続75日行った。

3. 調査組織は、以下の通りである。

会長　　蜂谷昭夫（八千代市教育委員会教育次長）

事務局長　清水盛人（八千代市教育委員会社会教育課長）

小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）

朝比奈竹男（八千代市教育委員会社会教育課文化係主事）

調査担当者　林勝則

調査員　　城前喜英、山下亮介

調査補助員　渡辺謙、蕨茂美（以上立正大学生）

調査参加者　秋山和子、秋山正道、板倉春枝、黒沢まさ、黒沢ます、黒沢ゆき枝、小林健一  
小林ヨネ、白井和子、白井トキ、鈴木時子、須田和子、染谷圭子、高橋道子  
立石てる子、立石みね子、中台せつ、村越光子、吉川志代、吉川ます

4. 遺物整理作業は主に林が行った。土器・土製品の実測は林が行い、石器・石製品の実測は林と城前が行った。トレースは主に林が行ったが、並木恵子、並木順子両名の協力を得た。写真撮影は林が行った。本書の執筆は林が行った。

5. 本書における遺構・遺物の実測図の縮尺は以下の通りである。住居址・溝状遺構1/80、土塙1/40・1/80、土器1/4、土製品1/1・1/2、石器1/3・1/2、石製品1/2、土器片拓本1/2・1/3。

6. 本書において使用した方位は磁北を指し、真北ではない。

7. 報告書刊行までに下記機関・諸氏に御協力・御助言を賜わりました。記して謝意を表します。

石井秀昭氏・大沢孝氏・小高春雄氏

## 目 次

例言

目次

第1章 調査の経過と方法	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	2
3 調査の経過	2
第2章 遺跡の概観	5
1 遺跡の立地	5
2 周辺の遺跡	5
3 層序	8
第3章 遺構と遺物	10
1号遺構	10
2号遺構	10
3号遺構	11
4号遺構	16
5号遺構	18
6号遺構	22
7号遺構	25
8号遺構	26
9号遺構	27
10号遺構	27
11号遺構	30
12号遺構	31
13号遺構	32
14号遺構	35
15号遺構	38
16号遺構	40
17号遺構	42
18A・B号遺構	45

19号遺構	45
その他の遺物	48
第4章 小結	53
遺構	53
遺物	54
まとめ	55

## 挿図目次

第1図 平戸道地遺跡全測図	付	第24図 10号遺構出土遺物拓影	29
第2図 平戸道地遺跡の位置と周辺の遺跡	7	第25図 11号遺構実測図	30
第3図 層序	9	第26図 11号遺構出土遺物実測図	30
第4図 1・2号遺構実測図	10	第27図 11号遺構付近出土遺物拓影	30
第5図 2号遺構出土遺物実測図	10	第28図 12号遺構実測図	31
第6図 2号遺構出土遺物拓影	11	第29図 12号遺構出土遺物拓影	32
第7図 3号遺構実測図	12	第30図 13号遺構実測図	33
第8図 3号遺構出土遺物実測図(1)	14	第31図 13号遺構出土遺物拓影	33
第9図 3号遺構出土遺物実測図(2)	15	第32図 13号遺構出土遺物実測図	34
第10図 4号遺構実測図	16	第33図 14号遺構実測図	35
第11図 4号遺構出土遺物拓影	17	第34図 14号遺構出土遺物実測図	36
第12図 5号遺構実測図	19	第35図 14号遺構出土遺物拓影	37
第13図 5号遺構出土遺物実測図	20	第36図 15号遺構実測図	39
第14図 6・7号遺構実測図	21	第37図 15号遺構出土遺物実測図	39
第15図 6号遺構出土遺物実測図	23	第38図 16号遺構実測図	41
第16図 6号遺構出土遺物拓影	24	第39図 16号遺構出土遺物実測図	41
第17図 8号遺構実測図	25	第40図 17、18A・B号遺構実測図	43
第18図 8号遺構出土遺物実測図	26	第41図 17、18A・B号遺構出土遺物実測図	
第19図 9号遺構実測図	26	図	44
第20図 9号遺構出土遺物拓影	27	第42図 17、18A・B号遺構出土遺物拓影	44
第21図 9号遺構出土遺物実測図	27	第43図 19号遺構実測図	46
第22図 10号遺構実測図	28	第44図 19号遺構出土遺物実測図(1)	47
第23図 10号遺構出土遺物実測図	29	第45図 19号遺構出土遺物拓影	47

第46図	19号遺構出土遺物実測図(2).....47	第48図	その他の遺物(2).....50
第47図	その他の遺物(1).....49	第49図	その他の遺物(3).....50

## 挿表目次

第1表	住居址一覧表.....52
-----	---------------

## 図版目次

図版 1	調査前近景 .....	59	図版13	11号遺構 .....	71
	2区遺構確認状況 .....	59		11号遺構出土遺物 .....	71
図版 2	1・2号遺構 .....	60	図版14	12号遺構 .....	72
	2号遺構出土遺物 .....	60		12号遺構出土遺物 .....	72
図版 3	3号遺構 .....	61	図版15	13号遺構 .....	73
	3号遺構出土遺物(1) .....	61		13号遺構出土遺物 .....	73
図版 4	3号遺構出土遺物(2) .....	62	図版16	14号遺構 .....	74
図版 5	4号遺構確認状況 .....	63	図版17	14号遺構出土遺物 .....	75
	4号遺構 .....	63	図版18	15号遺構 .....	76
図版 6	5号遺構 .....	64		15号遺構出土遺物 .....	76
	5号遺構遺物出土状況 .....	64	図版19	16号遺構 .....	77
図版 7	4号遺構出土遺物 .....	65		16号遺構出土遺物 .....	77
	5号遺構出土遺物 .....	65	図版20	17号遺構 .....	78
図版 8	6・7号遺構 .....	66		17、18A・B号遺構出土遺物 .....	78
	6号遺構遺物出土状況 .....	66	図版21	18A・B号遺構 .....	79
図版 9	6号遺構出土遺物 .....	67	図版22	19号遺構 .....	80
図版10	9号遺構確認状況 .....	68		19号遺構出土遺物 .....	80
	9号遺構 .....	68	図版23	4区全景(東より) .....	81
図版11	10号遺構 .....	69		4区全景(西より) .....	81
	10号遺構遺物出土状況 .....	69			
図版12	8号遺構出土遺物 .....	70			
	9号遺構出土遺物 .....	70			
	10号遺構出土遺物 .....	70			

## 第1章 調査の経過と方法

### 1. 調査に至る経緯

昭和57年、八千代市經濟部農政課より八千代市教育委員会へ、市北部の平戸地区（字道地）における圃場整備事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、相談がもたらされた。事業内容について説明を受けると、1) 事業は、地権者の共同施行で実施する 2) 国庫補助事業として実施する 3) 事業は換地を主体とした耕地整理であり、農道の舗装化等一部の工事を伴う、という概要であった。

事業対象地は印旛沼疏水路を東に望む、標高20m 前後の台地上の畠地であった。平戸台古墳群（註1）が台地上平坦部縁辺に所在し、弥生式土器・土師器などが散布していた。また近隣には佐山貝塚（註2）などが所在し、市内でも有数な遺跡所在密度の濃い地区のひとつでもある。このため遺跡と事業のかねあいについて慎重に取り扱うこととし、事業主体者（平戸地区画共同施工・代表中台達夫）よりの照会を千葉県教育委員会へ求めた。

照会文提出を受けた市教育委員会は、上記の概要を書き添えて県教育委員会に副申し、県・市の文化財担当者によって現地を踏査し、遺跡該当地であることを再確認した。この結果をもとに遺跡の取り扱いについて慎重に市經濟部を交え四者で協議を重ね、

- 1) 施工事業の主体である換地地区は工事を伴わない境界変更であるため、そのままとする。
- 2) 農道部分等工事対象となる地区については、台地上に細長く敷設されることから予備調査を実施し、その結果をもとに取り扱いを再度協議することとなった。

予備調査は同年12月初めに、八千代4Hクラブの応援をえて4日間実施し、調査地点によって遺構検出密度の濃淡はあるものの住居址が確認された。また表土耕作土層（約20~100cm）は、地点によって極端に差があることも把握できた。

この予備調査の結果をもとに再度協議を行い、道路部分内の遺構確認の範囲を広げて本調査を実施することとなった。しかし市教育委員会では国庫補助を得て、高津新山遺跡の確認調査を実施中であったため調査体制づくりに苦慮し、遺跡調査会を組織して調査を実施することとした。発掘調査は58年1月7日より同年2月13日まで行い、次に報告する成果をえた。

註1 円墳7基が散在して展開する。土取り、開墾等により遺存状態は、不良である。昭和46年8月一基緊急発掘調査（土取りのため）を実施。主体部は組合式箱式石棺、人骨2体を検出した。

千葉県立八千代高等学校史学会「八千代市平戸台古墳調査概報」史学報2 昭和46年

註2 印旛沼に注ぐ神崎川に面し標高20m前後の台地上に立地する、縄文時代後期の点列馬蹄形貝塚。昭和49～50年にかけて、市史編纂事業のため一部調査を実施。

[参考文献] 八千代市「八千代市の歴史」昭和53年

## 2. 調査の方法

本調査の調査区域は、基本的には道路敷設部分のみであり、必然的に横幅の限られた細長いものとなった。

表土の除去は、調査期間・調査面積・確認遺構数等との関係から重機を使用せざるを得なかった。そのため、重機の都合のつくまでは人力により表土除去を行ったが、残りの部分は重機によりソフトローム上面まで土の除去を行った。

遺構は、既に八千代市教育委員会による予備調査のトレンチ発掘により確認されており、本調査では遺構確認部分を計画道路幅(4.5m)に両脇1mずつ拡長して行った。しかし、幅6.5mの調査では比較的遺構としては規模の小さい住居址でさえ、一遺構全て調査できることは希であり、検出したほとんどの遺構が二分の一程度の摘み食いになってしまったことは非常に残念であり、後悔にたえない。

調査区域内において遺構はおおよそ4の分布を示し、東方北側を1区、東方南側を2区、北方を3区、西方を4区として調査を進めた。

遺構は、調査区域との関係により全体を調査する事の出来ないものが殆どであり、そのため一部調査の遺構セクション図は調査区域内と外との境界をもってした。

遺構番号は、遺構の種類に関わらずに調査順に付していく。報告書では区毎にまとめて述べるために発掘時とは番号の異なる遺構があるが、その場合は常に旧番号を書き加えた。

遺構の実測は平板により20分の1で、その他の図面も20分の1で作製した。

また、1日も早い終了を期待される調査であったため、休日は設けず雨天日を休日とした。

## 3. 調査の経過

本調査は、1983年1月7日より実施し、同年2月13日に終了した。調査面積は、約1100m<sup>2</sup>(試掘トレンチ200m<sup>2</sup>を含む)である。検出した遺構は、住居址15軒・土塁2基・溝状遺構2条で合計19を数える。

1月7日 打合せ及び器材の購入。

1月8日 手掘りで1～3区の表土除去。2区で土塁1、3区で住居址1軒を確認する。

1月9日 昨日に引き続き、1区の表土除去を行う。

1月10日 引き続き1区の表土除去を行い、住居址2軒を確認する。午後になり重機が到着し、

2区の掘り残っていた部分の表土除去を行い、住居址2軒を確認する。以後表土除去作業は重機によって行う。4区の表土除去を西側から始める。

1月11日 1・2区のジョレンかけを行う。4区表土除去作業終了。トレンチャーによる擾乱が激しいが住居址と思われる落ち込み約10軒を確認する。

1月12日 4区ジョレンかけ、杭打ち。原点移動。4区東側で広範囲に黒い落ち込みを確認する。

1月13日 2区確認状況撮影。1・3・4号遺構の調査を開始する。

1月14日 1号遺構は、住居址と溝状遺構の重複と判明した。3号遺構は、硬質な床を確認する。

4号遺構は、セクションベルトを残し掘り上がる。9号遺構の調査を開始する。

1月15日 3・9号遺構の遺物取上げを行う。6号遺構の調査を開始する。

1月16日 9号遺構のセクションを実測する。5号遺構の遺物取上げを行う。

1月17日 3号遺構のセクションを実測する。4号遺構の遺物取上げを行う。9号遺構のセクションベルトを除去する。6号遺構は、硬質な床を確認する。4区の遺構の調査を開始する。

1月18日 降雨のため中止

1月19日 1・2号遺構のセクションを実測する。3号遺構の平板実測を行う。

1月20日 6号遺構は、土壇と重複していることが判明した。

1月21日 1・2・4号遺構の平板実測を行う。

1月22日 1・2・4号遺構の写真撮影を行う。2区の全測を行いう。本日で2区の作業を終了する。

1月23日 9号遺構の平板実測・写真撮影を行う。6号遺構は、遺物出土状況撮影後に遺物取上げを行う。

1月24日 9号遺構の壁外柱穴を確認する。5号遺構のセクションを実測する。14号遺構は、激しい擾乱のためにプランが全くはっきりせず、床面を追って行く事にした。

1月25日 9号遺構の補足図面をとる。19号遺構のセクションを実測する。10号遺構の遺物取上げを行う。

1月26日 5～7号遺構の写真撮影を行う。

1月27日 5～7号遺構の平板実測を行う。

1月28日 14・16号遺構の遺物取上げを行う。

1月29日 6号遺構のセクションを実測する。

1月30日 16号遺構のセクションを実測する。

1月31日 16号遺構の平板実測を行う。

2月1日 19号遺構の平板実測を行う。10・13・14号遺構のセクションを実測する。

2月2日 降雨のため中止。

- 2月3日 15号遺構のセクションを実測する。
- 2月4日 10号遺構の平板実測を行う。
- 2月5日 14・15号遺構の遺物取上げ、平板実測を行う。
- 2月6日 12・13号遺構の遺物取上げ、平板実測を行う。
- 2月7日 12～16号遺構の写真撮影を行う。17・18号遺構の遺物取上げ、平板実測を行う。
- 2月8日 11号遺構の平板実測を行う。4区の全測を行う。
- 2月9日 17・18号遺構のセクションを実測する。
- 2月10日 11号遺構の写真撮影を行う。
- 2月11日 全区の遺物取上げ。ローム層の調査を行う。
- 2月12日 新たに8号遺構を確認する。
- 2月13日 8号遺構のセクションの実測・平板実測を行う。全作業を終了する。

## 第2章 遺跡の概観

### 1. 遺跡の立地

平戸道地遺跡は、千葉県八千代市平戸字道地に所在する。遺跡は、現在ほとんどが畠地となつておらず、他は農道・宅地である。この内調査は、道路敷設予定部分の畠地及び農道の部分について行った。

本遺跡は、関東平野の東南部、千葉県の北半を占める下総台地の西部、八千代市の北部に位置し地形面区分では下総下位面にあたる。また、本遺跡の所在する台地の北側、神崎川により開析された谷の南岸にあたる佐山の集落付近には千葉段丘面がみられる。

遺跡は、北に北西から南東へ流下する神崎川、東に北から南へ流下する新川が流れ、ちょうど両河川の合流する付近の西の台地上にある。台地は、両河川により樹枝状に開析され、東に突出した舌状を呈している。調査区は、この台地の南側の部分であり、新川を東と南に望む。標高は、20~21m程度であり、水田面との比高は約15mである。

#### 〈参考文献〉

1981. 3 佐々木茂他 「八千代市の地形・地質」『八千代市文化財総合調査報告Ⅰ』

### 2. 周辺の遺跡

八千代市は、古くは先土器時代から新しくは江戸時代まで总数264もの遺跡が確認されており、京成電鉄沿線の宅地化が進んでいる区域など遺跡確認不可能な部分を除いて台地上全て遺跡として捉えられるとしても過言ではない。

先土器時代の遺跡としては、村上遺跡（ナイフ形石器・ポイント等、註2）、萱田町川崎山遺跡（ナイフ形石器、註3）、池ノ台遺跡（ポイント、註4）、高津新山遺跡（ナイフ形石器、ポイント等、註5）、白幡前遺跡（註6）等があげられ、分布調査等により確認された遺跡を含めると10遺跡以上を数える。今回の調査においても1点の剥片が出土しており、15・16で当時代の遺物が採集されている事と考え合わせると興味深い。また、5・103も当時代の遺跡と確認されている。

縄文時代の遺跡としては、佐山貝塚（中～晚期、12）、神野貝塚（中～後期）が著名であり、高津新山遺跡では前期から晚期、北海道遺跡では早期から中期（註7）、白幡前遺跡では早・中期の遺物を出土している。分布調査等で確認された遺跡は150以上を数えるが、発掘調査で住居址の検

出された例は少ない。その事からも、今回の調査で断言は出来ないが阿玉台期と思われる住居址を検出した事は一つの成果とも言える。平戸道地遺跡の周辺では、図示した遺跡の内古墳を除き全て縄文土器が採集されており、佐山貝塚の存在を考え合わせると多くの生活の痕跡を期待できるであろう。53では中期の土塗が確認されており、以上の事の一端を示しているのではないかと思われる。

弥生時代の遺跡としては、阿蘇中学校東側遺跡、村上遺跡、桑橋新田遺跡、萱田町川崎山遺跡、おおびた遺跡等が知られる。今回の調査では後期の住居址9基を検出しており、平戸道地遺跡の周辺にも当時代の多くの遺跡が確認されている(5・8・12・15・16・17・37・38・59・96・100・102・103)。特に12・16・17は本遺跡も含めて大きく捉えてゆかねばならないであろう。

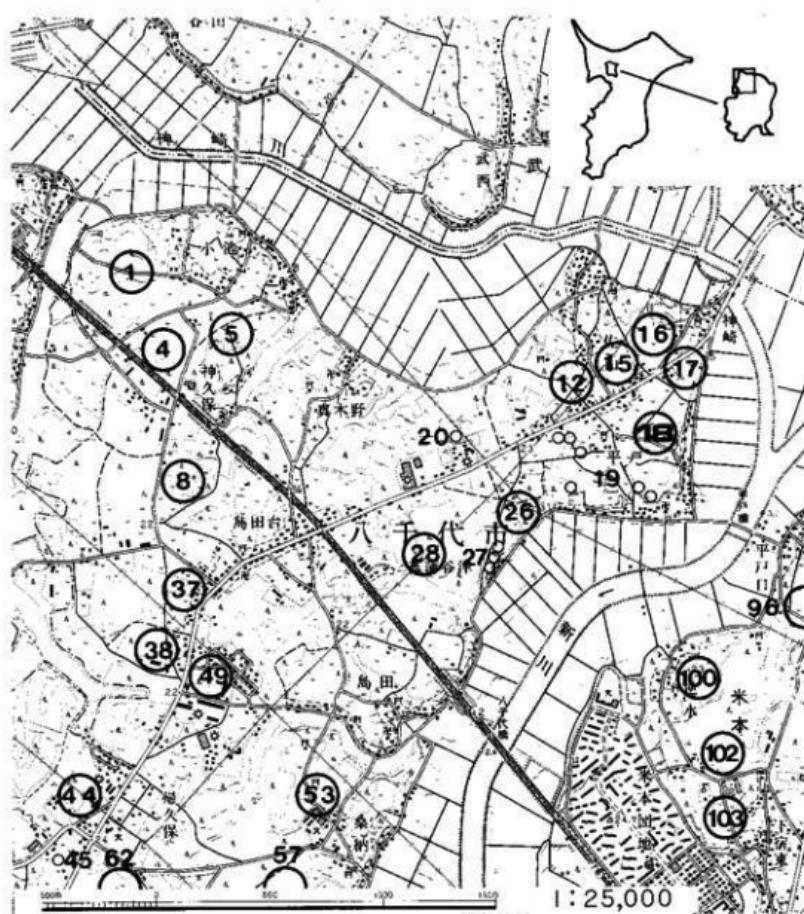
古墳時代の遺跡としては、萱田町川崎山遺跡、北海道遺跡、白幡前遺跡、小板橋遺跡、佐山寺ノ下遺跡(16)等が知られる。今回の調査では和泉期の住居址3基を確認しており、平戸道地遺跡の周辺では1・4・5・17・49・100が当期の遺跡と確認されている。また、古墳は七百余所神社古墳、根上神社古墳、上の山古墳、保品栗谷古墳(消滅)、神野芝山古墳群が知られ、本遺跡周辺には19(円墳7)、20(円墳)、27(円墳3)、45(円墳)が存在する。

奈良・平安時代の遺跡としては、村上遺跡、名主山遺跡、池ノ台遺跡、北海道遺跡、高津新山遺跡等が知られる。墨書き土器を多く出土している事などは注目される点である。本遺跡の周辺では53より住居址、堀立柱建物址が検出されている。

中近世の遺跡としては城址や塚が認められ、本遺跡周辺には島田城跡、作山塚群、神久保塚群、佐山塚群、島田塚群等が存在する。

#### 〈参考文献〉

- 註1. 1983. 3 八千代市教育委員会 『八千代の遺跡—千葉県八千代市埋蔵文化財所在調査報告書一』 ※他にも多くの箇所で参考とさせて頂いた。
- 註2. 1974 房總考古資料刊行会 『八千代市村上遺跡群』
- 註3. 1979 山武考古学研究所 『萱田町川崎山遺跡』
- 註4. 1979 山武考古学研究所 『池ノ台遺跡』
- 註5. 1982. 3 八千代市教育委員会 『千葉県八千代市高津新山遺跡—昭和56年度確認調査の概要一』
- 註6. 1979 千葉県文化財センター 『千葉県文化財センター年報 No.5』
- 註7. 註6に同



第2図 平戸道地遺跡の位置と周辺の遺跡

凡例

1. 地図中の遺跡番号は、八千代市教育委員会作製の遺跡分布図（註1）の遺跡番号と一致する。
2. 市教育委員会作製の遺跡分布図によると、第2図に示した範囲の台地上は、隙間なく遺跡の存在が確認されている。その遺跡全てを掲載すると煩雑になり地図が見にくくなるため、本調

査との関係から弥生（後期）・古墳時代（和泉期）の遺跡と確認されているものと古墳、その他に調査の行われた遺跡について掲載した。

3. 大きな丸印は、遺跡の大凡の位置を示す。小さな丸印は、古墳の大凡の位置を示し、形態・規模に関わらず統一した。
18. 平戸道地遺跡 1. 作山遺跡（小池寺山遺跡） 4. 庚申前遺跡 5. 佐山貝塚
15. 新久遺跡 16. 佐山寺ノ下遺跡 17. 沼上遺跡 19. 平戸台古墳群 20. 真木野古墳 26. 平戸台南遺跡 27. 間見穴古墳群 28. 間見穴遺跡 37. 高堀遺跡（島田台遺跡） 38. 島田台大作遺跡 44. 鶴作台遺跡 45. 追分古墳 49. 島田中台遺跡（島田遺跡） 53. 桑納前畠遺跡 57. 桑納遺跡 62. 作ヶ谷津遺跡 96. 平戸口遺跡 100. 逆水遺跡 102. 鳥ヶ谷遺跡 103. 大山遺跡

### 3. 層序

本調査では、1点限りではあるが15号遺構より先土器時代の所産と思われる剥片が出土した。それにより、立川ローム層中の調査の必要性がでてきたため、15号遺構の南東3mの箇所に2×2mの範囲で武藏野ローム層最上部まで掘り下げ、遺物の有無の確認を行った。その結果、遺物の出土は皆無であった。以下、その確認坑における立川ローム層についての概要を述べる。

確認坑における立川ローム層は1.5~1.6mの堆積を示し、大別すると5層に区分でき、さらに細別すると8層に区分が可能である。

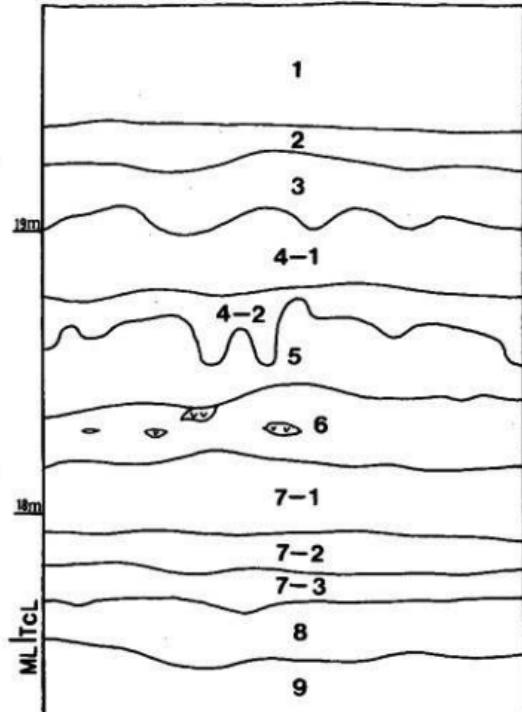
- 1層 表土擾乱層 暗灰褐色を呈し、非常に軟質で粘性に乏しい。
- 2層 完黑色土 粗じょうでしまりがある。
- 3層 暗褐色土 ソフトロームの漸移的なものである。
- 4-1層 黄褐色ローム層 いわゆるソフトロームである。
- 4-2層 黄褐色ローム層 ハードロームのソフト化したものである。
- 5層 黄褐色ローム層 いわゆるハードロームである。B.B.1に相当する。クラックの発達が著しく、微細なバミスを混入している。
- 6層 淡黄褐色ローム層 硬質で火山ガラスを多く含みキラキラとしている。ラビリ・スコリアを含む。断続的に塊状のA.Tを含む。
- 7層 B.B.2に相当する。
- 7-1層 褐色ローム層 粘性が強い。
- 7-2層 薄橙褐色ローム層 やや明るく、8層に似る。
- 7-3層 暗褐色ローム層 むしろ黒色に近く、よく連続している。
- 8層 橙褐色ローム層 少量のスコリアを含む。立川ローム層最下部。

9層 橙褐色ローム層 8層より暗く、粘性が強い。武藏野ローム層最上部。

以上が、確認坑における立川ローム層の概要であるが、これを鈴木道之助氏によって統一が試みられた（註1）層位に照合すると、4-1層がIII層、5層がIV・V層、6層がVI層、7層がVII層、8層がVIII層に相当すると思われる。尚、6層に認められるATは層上半に集中しており、層下半にATは（肉眼では）認められない。また、7層は色調により明らかに区分できうるものであり、層厚も一定したものもっている。とにかく、調査期間の関係で僅か $2 \times 2m$ の範囲を、しかも一ヶ所のみの調査であり、全てを参考として提示する次第である。

〈参考文献〉

註1. 1976 鈴木道之助 「地理的環境と立川ローム層の層位—房總における先土器文化の概要と変遷」『研究紀要』1



第3図 層序

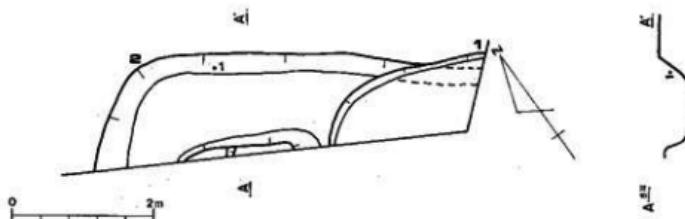
### 第3章 遺構と遺物

#### 1号遺構 一住居址一 (第4図、図版2)

2区東側より検出する。2号遺構とは重複しており、本址は2号遺構の覆土上に貼床を行っている。遺構はそのほとんどの部分が調査区域外となるため、調査は全体像の $\frac{1}{2}$ 程度である。形態・規模に関しては、一部分の調査のため判然としないが、検出部分より推測すると隅丸の方形になると思われる。壁高は、北側の重複の見られない部分で16cmを測る。床は、ハードロームによる貼床であり、明瞭である。調査部分においては、カマド或いは炉・壁溝・柱穴等を検出することはできなかった。遺物は、土師器小片が僅かに出土している。

#### 2号遺構 一溝状遺構一 (第4図、図版2) (旧6号遺構)

2区東側より検出する。1号遺構と重複しており、1号遺構は本址覆土上に貼床を行っている。遺構はそのほとんどの部分が調査区域外となり、形態・規模に関しては不明であるが、コーナー



第4図 1・2号遺構実測図



第5図 2号遺構出土  
遺物実測図

を持つ溝状の遺構である。出土遺物は、コーナーの付近より流れ込む形で和泉期の高環形土器脚部が出土している。他に、アサリ1個及び縄文・弥生土器片が出土している。

遺物 (第5、6図) (1)高環形土器 脚部 $\frac{1}{2}$ 遺存。外面は縦方向のていねいなヘラナデ、脚部内面は縦方向の荒いヘラナデの後に横ナデによって仕上げられている。坏部内面には焼成前に施された浅い刻みが見られる。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。内面は暗褐色、外面は明るい茶褐色を呈する。(2~4)いずれも無節縄文の施



第6図 2号遺構出土遺物拓影

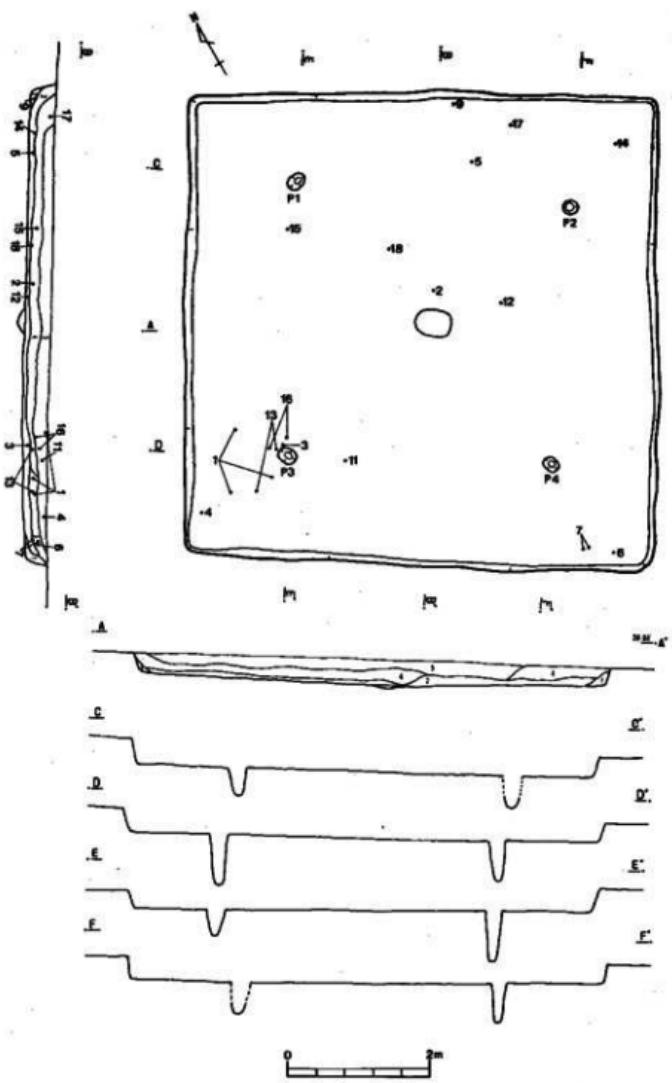
されるものである。繊維を含む。棒軸に縄をそえ、それに縄を巻いた一種の撚糸文で同じ文様が表出できる。縄文前期黒浜式土器であろう。(5)沈線間の隆帯上にR L 単節縄文が施文される。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は良好で極めて硬質である。色調は、内外橙褐色を呈す。縄文晩期安行式土器であろう。(6~10)壺形土器洞部片 (6)は沈線により区画された内に羽状縄文 (LR + RL) が施文される。無文部は赤彩が施される。(7~10)は同一個体と思われるもので、鋸歯状の沈線区画内に羽状縄文 (RL + LR) が施文される。無文部は赤彩が施される。弥生後期久ヶ原式土器であろう。

### 3号遺構 一住居址一 (第7図、図版3) (旧2号遺構)

2区より検出する。東2mに2号遺構が存在する。形態は方形であり、東壁6.72m、西壁6.48m、南壁6.60m、北壁6.63mを測る。壁高は、西壁で約35cmである。炉は遺構中央に位置し、梢円形で50×37cm、深さ8cmを測る。柱穴は4個で、方形に配置されている。P1、梢円形28×21cm、深さ40cm。P2、円形21×20cm、深さ45cmで上部に大きく搅乱を受けている。P3、梢円形26×22cm、深さ72cm。P4、梢円形22×19cm、深さ56cm。壁溝は見られない。床は、全体的に極めて硬質であった。覆土は5層で、1層が軟質でしまりのない暗褐色土、2層が小粒のロームブロックを多く含む暗褐色土、3層がロームブロックを若干含む暗褐色土、4層が焼土粒・ロームブロックを若干含む黒褐色土、5層が焼土粒を含まない黒褐色土である。また、P3に近接するコーナー部より、投げ込まれたと思われる焼土を大量に検出した。遺物は、P2・P3・P4に近接するコーナー付近より多く出土し、全体的に出土量が多く、縄文前期土器・弥生後期土器の小片も出土している。

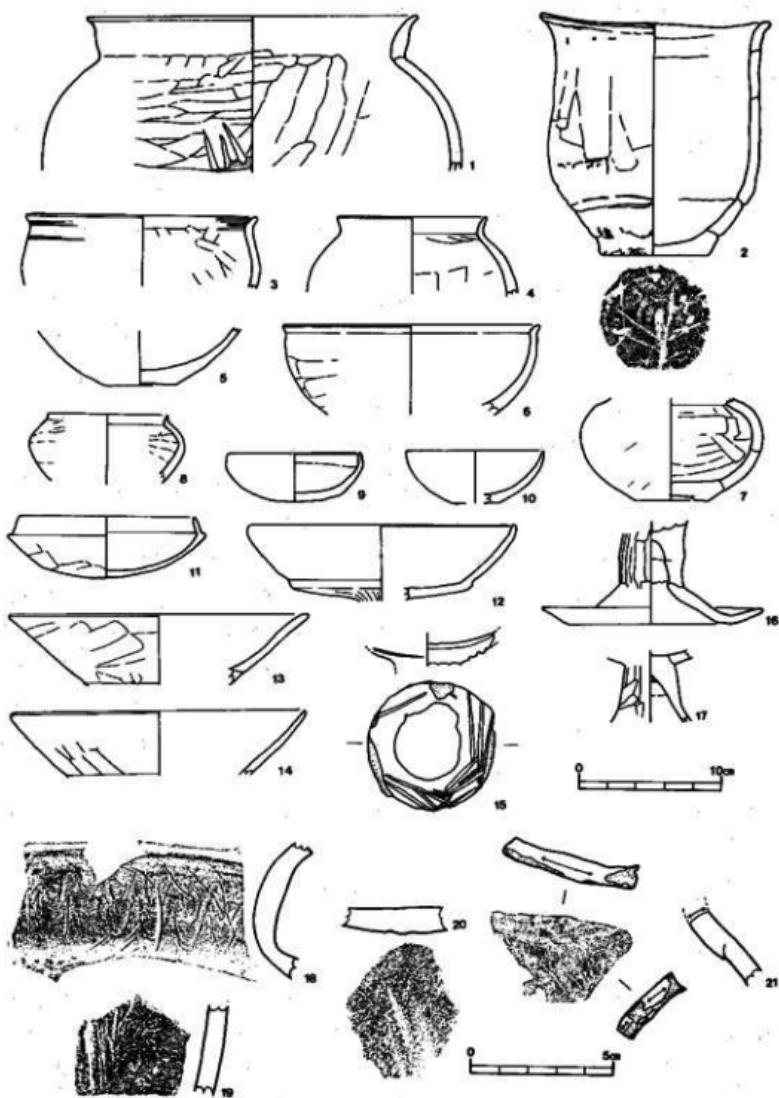
### 遺物 (第8、9図)

本址からは非常に多くの土器の出土をみたが、そのほとんどは小破片であった。(1)壺形土器上半部1/6遺存。口径23.2cm、残存高11.0cmを測る。肩部が強く張り、口縁部は「くの字」形に外反する。外面はていねいなヘラナデが施され、口縁部は横ナデによって仕上げられている。ま

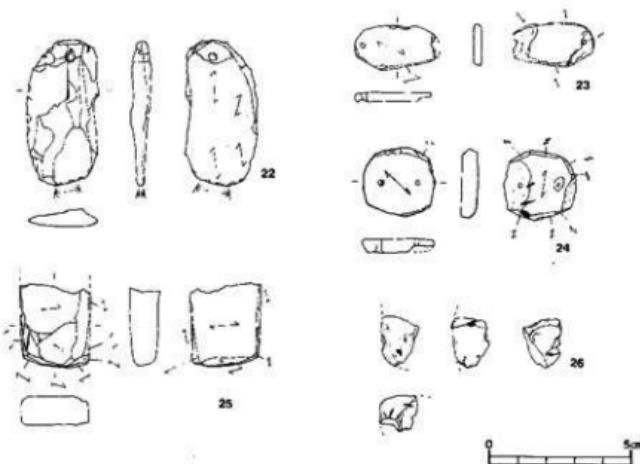


### 第7図 3号造構実測図

た、胴部には、焼成後に施されたV字形の刻みが3条みられる。深さは2mm程である。内面は大まかなヘラナデが施されている。胎土には小石を含み、焼成は良好で極めて硬質である。色調は、内外面共に褐色を呈する。(2) 瓢形土器 上半部1/5欠失。口径16.1cm、底径7.4cm、器高17.1cmを測る。胴下半部に輪積痕を有し、最大径を口縁部に持つ。底部は、木葉痕を有す。外面は、上半部がヘラ削り、下半部は粗雑な作りで器面がザラザラしている。内面にはヘラナデがみられる。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色調は、外面が褐色から黒褐色、内面が茶褐色から暗褐色を呈する。(3) 瓢形土器 上半部2/5遺存。口径16.3cm、残存高5.1cmを測る。口径と胴部最大径がほぼ等しい土器である。外面は、胴部がヘラナデ、口縁部には横ナデが施される。内面にはていねいなヘラナデが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、内外面共に赤褐色及び黒褐色を呈する。(4) 瓢形土器 上半部2/5遺存。口径10.5cm、残存高5.7cmを測る。胴部は球形を呈し、口縁部は「くの字」形に外反する。内外面共にナデにより仕上げられている。焼成は良好で非常に硬質である。色調は、外面が橙褐色から暗褐色、内面が暗褐色を呈する。(5) 瓢形土器 底部2/5遺存。底径4.8cm、残存高4.0cmを測る。胴部が球状になるものの底部である。内外面共にヘラナデにより仕上げられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が赤褐色、内面が黄褐色を呈する。(6) 鉢形土器 小破片。口径18.0cm、残存高6.4cmを推測する。半球形状を呈し、口縁部は外反する。外面はヘラ削りが弱く残り、内面はていねいに磨かれている。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。外面にはススが付着しており、内面は全て赤彩されている。(7) 増形壺 胴上半から底部にかけて1/2遺存。底径5.0cm、残存高7.3cmを測る。胴部は扁平な球状を呈し、底部は高台状の貼付けにより中央が凹んでいる。外面は全面に赤彩が施されるが剥落が激しい。内面は荒いヘラナデがみられる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。(8) 梶形土器 小破片。口径8.2cmを推測し、残存高は4.8cmを測る。胴部は扁平な球状を呈し、短かな口縁部は直立する。内外面共にていねいなヘラナデが施され、内面は全体に、外面は上半部に赤彩が施される。焼成は良好で硬質である。(9) 坯形土器 本調査における唯一の完形土器である。口径9.3cm、高さ3.4cmを測る。丸底を呈し、口縁部はやや内傾する。内外面共に横方向のナデが施される。また、内外面全体に赤彩が施されるが、内面は斑状の剥落がみられ、外面も赤彩が剥げかけている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。(10) 坯形土器 2/5遺存。口径9.6cm、底径3.3cm、器高3.7cmを測る。小形の底部から丸味を持って立ち上がる。器面は内外共にヘラ磨きが施される。焼成は良好で硬質である。内外面全体に赤彩が施される。(11) 坯形土器 1/2。口径12.2cm、高さ4.4cmを測る。丸底を呈し、口縁部は内傾する。外面にはヘラ削りが弱く残り、内面にはヘラナデが施される。口縁部には横ナデが施される。焼成は良好で極めて硬質である。色調は、外面が褐色、内面が淡褐色を呈する。鬼高窯、6世紀末の所産である。(12) 高坯形土器 坯部約1/2。口径18.5cm、残存高5.5cmを測る。



第8図 3号遺構出土遺物実測図(1)



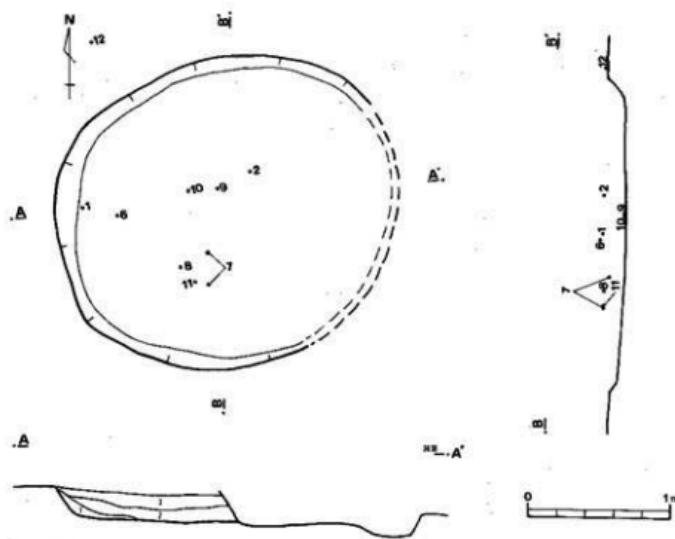
第9図 3号遺構出土遺物実測図(2)

坏部に棱を有し、体部は丸味を持って立ち上がる。器面は、内外面共に弱いヘラナデが施され、内外面全体に赤彩が施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。(13)高坏形土器 坏部1/4遺存。口径21.0cmを推測し、残存高5.0cmを測る。坏部は直線的に立ち上がり、口縁部端は丸味を持つ。外面は坏部下端に弱いヘラ削り、他は弱いヘラナデが施され、内面は横方向のいねいなヘラナデが施される。また、内外面全体に赤彩が施される。焼成は良好で硬質である。(14)高坏形土器 坏部1/5遺存。口径20.7cmを推測し、残存高4.6cmを測る。坏部は直線的に立ち上がり、口縁部端は尖り気味となる。器面は、外面坏部下半がヘラ削り、上半が縦方向のヘラナデである。内面は横方向のヘラナデがみられる。内外面全体に赤彩が施される。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。(15)高坏形土器 坏部下半のみ遺存。残存高2.4cmを測る。外面には焼成後に幾条もの刻みが施されている。器面は内外面共にヘラナデ、及び赤彩が施される。焼成は良好で硬質である。(16)高坏形土器 下半部1/2。底径15.5cm、残存高7.3cmを測る。円柱状の脚部を有し、裾部は跳ね上がっている。また、裾部には焼成時に生じた亀裂がみられる。脚部は外面がヘラ削り、内面はナデツケが施され、裾部端は内外面共に横ナデが施される。外面は全体に赤彩が施される。焼成は良好で極めて硬質である。内面は黒褐色を呈す。(17)高坏形土器 坏部と裾部を欠する。残存高5.1cmを測る。外面には弱いヘラナデ、脚部内面には横方向のヘラナデが施される。外面と坏部内面には全体に赤彩が施され、脚部内面には赤彩原料のついた指

文が1つ残されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。脚部内面は淡黄褐色を呈する。(18)須恵器壺形土器頸部片 外傾する頸部には波状文が施される。焼成は良好で硬質である。色調は、外面が青灰色、内面が灰色を呈する。(19-20)焼成後に刻みを施されたもので、(19)が壺形土器胴部、(20)が壺形土器底部である。(21)壺形土器肩部片であり、割れ口2面に磨痕を有するものである。(22・23・24)石製模造品 (22)は粘板岩製であり、一孔を有す。長さ5.2cm、幅2.6cm、厚さ0.7cm、重さ9.9gを測る。表面は研磨されるが、裏面は打欠のままである。(23・24)は双孔の円板であり、(縁?)雲母片岩製である。(23)は一部欠失するが、長さ2.8cmを残存し、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ2.7gを測る。(24)は長さ2.5cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm、重さ5.3gを測る。(25)扁平片刃石斧と思われるもので、砂質頁岩製である。長さ3.0cm、幅2.5cmを残存し、厚さ1.1cm、重さ12.9gを測る。弥生時代の所産である。(26)軽石製品 一部に研磨がみられる。長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ1.3cm、重さ0.6gを残存する。

#### 4号遺構 一土塗一 (第10図 図版5) (旧3号遺構)

2区西側より検出する。遺構確認時にアサリを大量に検出したが、これは本址を切って存在する擾乱塗(ゴミ穴)内に投げ込まれたものであり、本址に伴うものではなかった。形態は円形で、

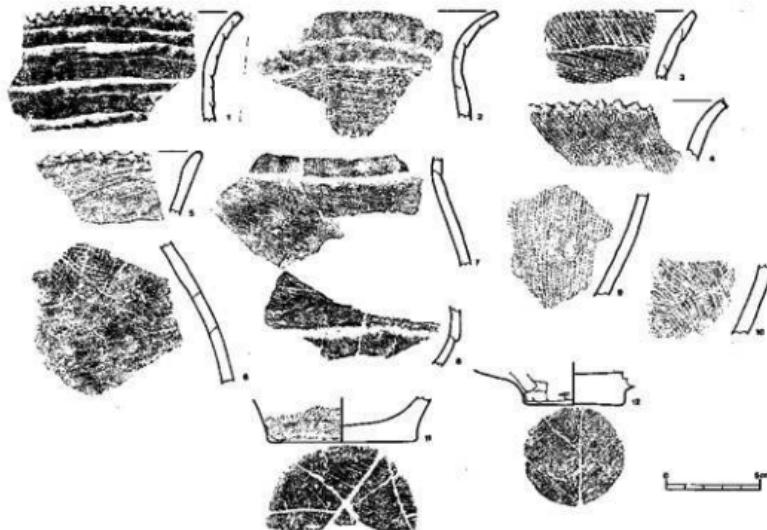


第10図 4号遺構実測図

2.45m(推定)×2.18m、深さ約20cmを測る。覆土は3層で、1層が軟質の褐色土、2層がロームブロックを多量に混える黒褐色土、3層がロームブロックを若干混える暗褐色土である。遺物は、弥生後期土器片が遺構中央部付近より多く出土しているが、総数は少ないものである。

#### 遺物 (第11図)

(1) 裂形土器 明瞭な輪積痕を有する口縁部片である。口唇部には棒状工具による押捺が認められる。輪積は現状では7段みられ、輪積部分が割れ口となっている。内面は弱い刷毛ナデによって仕上げられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈する。(2) 裂形土器 (1)と同じく口縁部に輪積痕を有する。輪積は明瞭に2段認められ、指頭による押さえつけがみられる。口唇部は、明瞭ではないが、LR単節繩文が施文されているようである。頸部は、荒い横方向のヘラナデが施される。胴部上半には刺突文が巡っている。(3) 貼付けによる複合口縁を有する裂形土器口縁部片である。口唇部は付加条繩文が施文されており、口縁部には口唇部と同一原体により施文されている。複合口縁部下には、原体の異った付加条繩文が施文されている。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。外面にはススが付着しており、内面は褐色を呈している。(4) 裂形土器口縁部片 口唇部は、内外



第11図 4号遺構出土遺物拓影

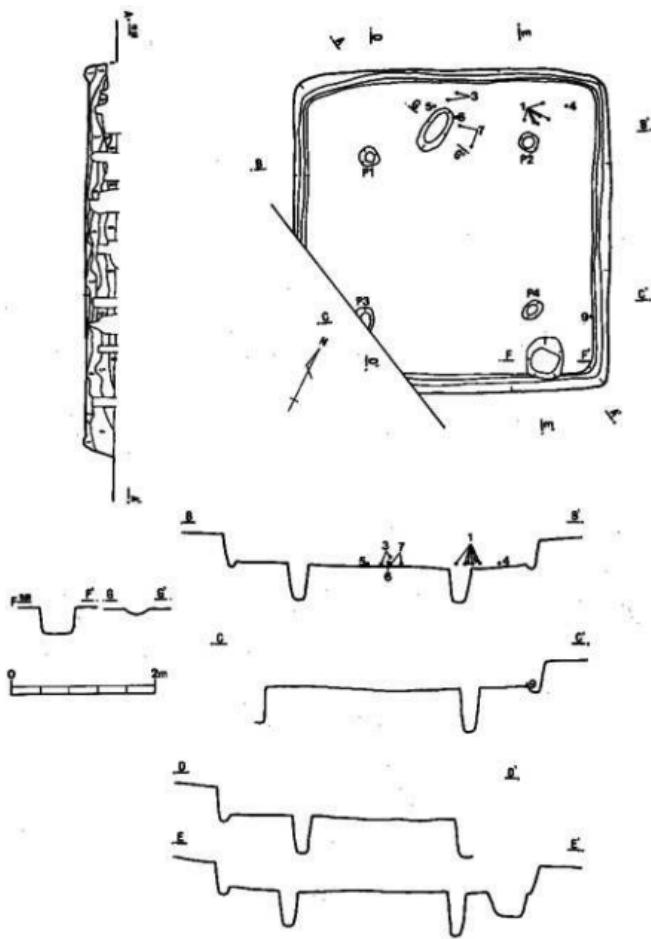
から交互に押捺されている。外面は付加条縄文が施されており、内面は横ナデが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が暗褐色、内面が茶褐色を呈する。(5) 壺形土器口縁部片 口唇部は内外より押捺されている。外面はヘラナデ、内面は横ナデが施される。胎土は僅かに砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が黒褐色、内面が褐色を呈する。(6) 壺形土器胴部片 内外面とも剥落が著しいが、羽状縄文が認められる。無文部には赤彩が施される。胎土には砂粒を多量に含み、軟質である。(7・8) 壺形土器胴部片 輪積痕が明瞭に認められるもので、(7)は上部割れ口が輪積部である。共に胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色調は、外面が褐色、内面が淡褐色を呈する。(9・10) 壺形土器胴部片 付加条縄文が施される。(11・12) 共に木葉痕を有する底部であり、(12)は壺形土器の底部となろう。(12)は遺構外の出土である。

### 5号遺構 一住居址一 (第12図、図版6)

1区、6号遺構より西約7mに位置する。遺構は、トレンチャによる攪乱を大きく受け、遺存状態は良いものではなかった。南側のコーナーを調査区域外とする。形態は方形を呈し、東壁4.40m、北壁4.40mを測る。炉はP1とP2の中間付近に位置し、梢円形を呈している。68×34cm、深さ18cmを測る。壁高は、西壁で40cmを測る。壁溝は、幅15cm前後、深さ7~10cm程度であり、全周すると思われる。柱穴は4個検出し、これが総数であろう。柱穴配置は方形である。P1、円形29×26cm、深さ53cm。P2、円形29×28cm、深さ47cm。P3、梢円形、深さ51cm。P4、梢円形30×23cm、深さ60cm。他に、東側のコーナー付近より貯藏穴と思われる掘り込みを検出した。方形を呈し59×50cm、深さ36cmを測る。遺物の出土はない。覆土は、1層がロームブロックと炭化物を多く含む褐色土、2層が軟質でさらさらとしており炭化物を若干含む褐色土、3層が多くのロームブロックと若干の炭化物を含む暗褐色土、4層が炭化物を含まない暗褐色土、5層が軟質でさらさらとしている黒褐色土、6層が5層より淡い色調を示す黒褐色土である。また、東側のコーナーの部分より若干の焼土塊を検出したが、これは住居廃絶後に投げ込まれたものであろう。遺物は、高環形土器がP2周辺より集中して出土している。また、石製模造品が東側コーナー付近より出土している。他に、縄文前期土器の小片が僅かに出土している。

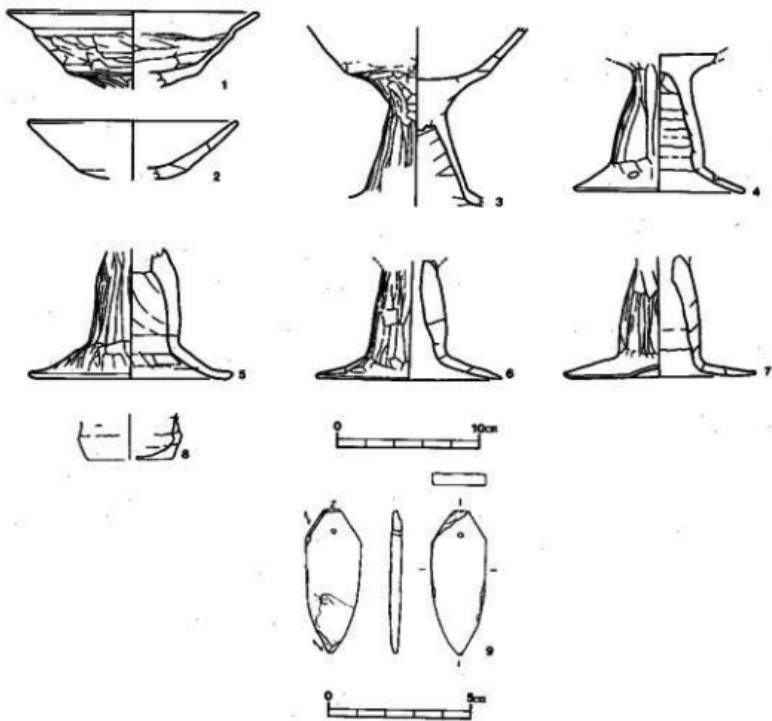
### 遺物 (第13図)

本址からは7個体の高環形土器が出土しているが完形品はない。また、剣形模造品が床面密着の状態で出土している。(1) 高環形土器 环部1/2。口径17.7cm、残存高5.4cmを測る。环部下半に稜を有し、口縁部は強く外反する。外面は、下方がヘラ削り、中央が横ヘラナデ、口縁部が横ナデである。内面は横ヘラナデである。焼成は良好で硬質である。色調は、外面が暗褐色、内面



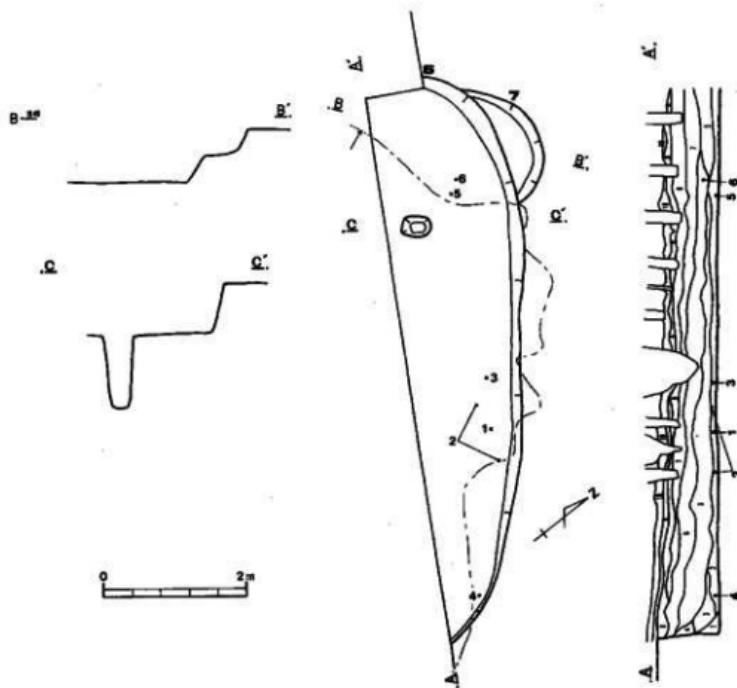
第12図 5号遺構実測図

が暗褐色から黒色を呈する。(2)高环形土器 坯部1/6遺存。口径14.9cmを推測し、残存高4.1cmを測る。緩やかな棱を有し、直線的に開く、外面はヘラ磨き、内面は下半がヘラ磨き、上半は横ナデのままである。焼成は良好で硬質である。(3)高环形土器 口縁部・裾部を欠失する。残存高12.7cmを測る。坯部には明瞭な稜を有し、脚部は丸味を持たず直線的である。逆さの状態で出土した。焼成は良好で硬質である。(4)高环形土器 脚部完存。底径12.0cm、残存高9.9cmを測る。脚部は丸味を持ち、裾部の広がりは小さい。裾部には、3ヶ所の浅い凹みを持つ。外面は入念な縦ヘラナデ、内面は横方向のナデが施されている。焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に褐色から暗褐色を呈する。(5)高环形土器 裾部1/4と脚部1/5を欠失する。底径14.3cm、残存高9.2cmを測る。脚部は丸味を有し、安定した裾部へと連続する。外面は縦ヘラナデ、内面は脚部がナデ、裾部がヘラナデ、内外面共に裾部端に横ナデが施される。焼成は良好で硬質である。色



第13図 5号遺構出土遺物実測図

調は、外面が茶褐色、内面が明橙褐色及び黒褐色を呈する。(6)高环形土器 脚部完存、裾部1/2欠。底径13.1cm、残存高8.1cmを測る。脚部は直線的で、同じく直線的な裾部へと連続する。脚部は内面から縦横に亀裂が入り、また裾部は橢円形を呈している。外面はヘラナデ、内面はナデによって仕上げられている。焼成は普通である。(7)高环形土器 脚部完存、裾部2/5欠。底径13.4cm、残存高8.6cmを測る。脚部は丸味を持ち、平らな裾部へと連続する。脚部は内外面より若干の亀裂が入り、裾部端は歪んでいる。外面はヘラナデ、内面はナデによって仕上げられている。焼成は普通である。(8)手捏土器1/5遺存。底径5.9cm、残存高3.2cmを測る。底部は中心に向かうに從い器厚を失い、0.15cmを測る程になる。内外面共にナデにより仕上げられている。焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に褐色を呈する。(9)劍形模造品 雲母片岩製であり、長さ5.1cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ5.8gを測る。頭部に小孔が施される。



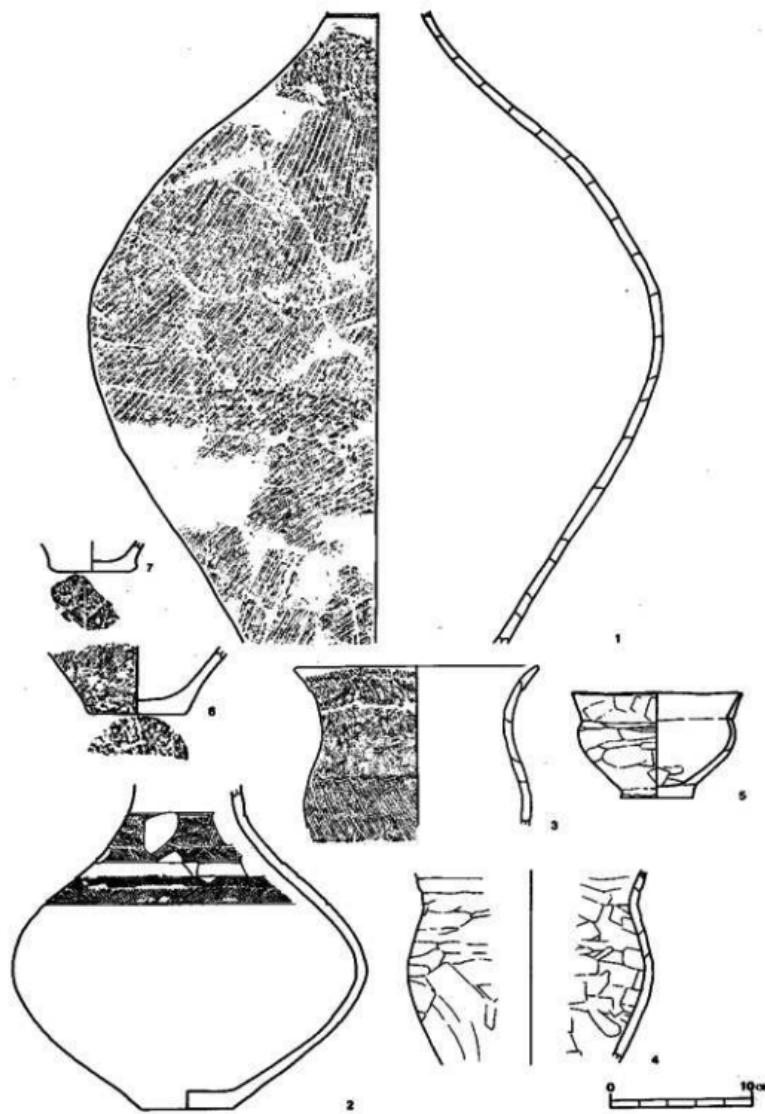
第14図 6・7号遺構実測図

## 6号遺構 一住居址一 (第14図、図版8) (旧8号遺構)

1区東側より検出する。7号遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。遺構は殆どの部分が調査区域外となり、調査は全体の1/3程度である。遺構確認時に本址のプランを覆うように焼土を検出したが、この焼土が本址と何らかの関係があるのかどうかは、部分的な調査のため明確な解答は出せなかった。形態は、小判形を呈すると思われる。規模は、長軸が9m前後を測ると推測されかなり大形の住居である。確認面から床面までの深さは85cmを測る。この床面までの深さが、激しいトレンチャー等による擾乱にもかかわらず、良好に遺物を保存する要因となった。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。床は全体に非常に硬質なものであり、壁際から中央に向うに従い僅かな高まりを見せる。柱穴は1個のみ検出した。方形を呈し、42×31cm、深さ103cmとしっかりしたものである。壁溝は現状では認められず、炉は区域外に存するであろう。覆土は、10層に分層した。1層は、硬くしまりのある暗褐色土。2層は、10mm程のロームブロックを若干含む暗褐色土。3層は2層より小粒のロームブロックを含む暗褐色土。4層は、硬くしまりのある褐色土。5層は、軟質でロームブロックを非常に多く含む暗褐色土。6層は、軟質でロームブロックを多く含む黒褐色土。7層は、軟質で粘性に乏しくさらさらとしている黒褐色土。8層は、小粒のロームブロックを僅かに含む黒褐色土。9層は、10mm程のロームブロックを僅かに含む黒褐色土。10層は、焼土である。遺物は、床面より僅かに浮いて、つまり2層中の出土が顕著であった。ほとんど弥生後期のものであるが、僅かに土師器・須恵器の小片も出土している。

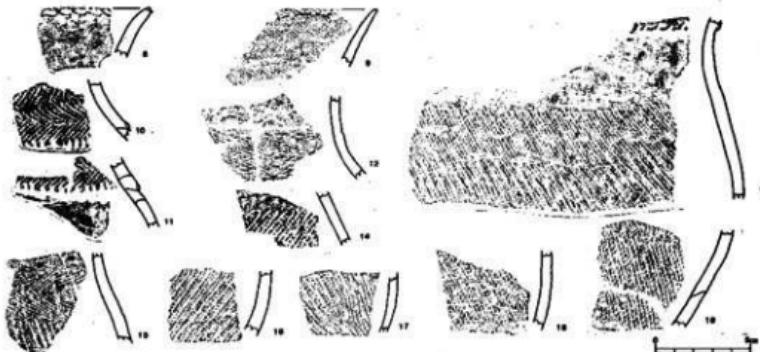
## 遺物 (第15・16図)

(1)壺形土器 胴部1/4遺存。現実には、胴部最大径部を境として、上半と下半は接合せず、復元実測である。胴部最大径40.5cm、残存高44.8cmを推測する。胴部中央部に最大径を有し、頸部は細く窄む。文様は上から、沈線文(1条遺存)+無文+羽状繩文(LR+RL)であり、以下胴部全体には付加条繩文が施される。内面は、剥落が著しい。胎土には荒い砂粒を多量に含み、焼成は悪い。色調は、外面が茶褐色を基調とし、内面は淡橙褐色及び黒色を呈す。(2)壺形土器 頸部から底部にかけて約1/2遺存。現実には、胴部最大径部を境として、上半と下半は接合せず復元実測である。胴部最大径24.7cm、底径6.4cmを測り、残存高23.0cmを推測する。胴部は最大径を中央部に有し、算盤玉状を呈する。頸部には、沈線で区画した内にRL+LR+RLの単節繩文による羽状繩文を施文する。胴部上半には、沈線で区画した内にRL+LRの単節繩文による羽状繩文を施文し以下へラナデが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は悪い。色調は、外面が黒色を呈し一部茶褐色を呈する。内面は、黒色を呈する。(3)壺形土器 口縁部3/5と胴部下半を欠失。口径17.0cm、胴部最大径16.0cm、残存高11.4cmを測る。複合口縁を有する。口唇部には(付加条?)繩文RL、口縁部は付加条繩文と原体の末端部による文様が施されており、頸部無文帯を狭んで



第15図 6号構出土遺物実測図

結節文2条と付加条縄文が施文されている。内面は平滑に仕上げられる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が暗褐色を呈し一部橙褐色を呈する。また、ススの付着が認められる。内面は、黒色を基調とする。(4) 瓢形土器 胴部1/5遺存。胴部最大径17.2cm、残存高13.8cmを測る。頸部には輪積痕を有し、現状では2段を遺存する。胴部は、内外面共にヘラナデが施される。外面は、一面にススが付着している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。内面は、黒褐色を呈する。(5) 鉢形土器 口縁部1/2欠失。口径11.8cm、胴部最大径11.1cm、底径5.0cm、器高7.5cmを測る。扁平な半球状を呈する胴部に、外反する口縁部が連続する。口縁部と胴部との接合部には輪積痕を有する。内外面共にヘラナデが施される。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が暗褐色、内面が黒褐色を呈する。(6) 瓢形土器、底部1/2。底径6.8cm残存高4.8cmを測る。付加条縄文が施文されている。底部には木葉痕を有する。二次焼成を受けており、内外面共に剥落が著しい。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が赤褐色、内面が淡褐色を呈する。(7) 瓢形土器 底部1/4遺存。底径6.1cm、残存高2.1cmを測る。底部には木葉痕を有する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で極めて硬質である。色調は、外面が褐色、内面が黒色を呈する。(8) 瓢形土器口縁部片 口唇部には指頭による押捺が施され、他は内外面共に横ナデが施される。胎土は精選されたものであり、細砂粒を含む。焼成は普通である。色調は、外面が淡橙色、内面が淡褐色を呈する。(9) 瓢形土器口縁部片 口唇部は繩文Rしが施文され、以下付加条縄文が施文されている。内面は、横方向のヘラナデが施される。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は普通である。外面は、全体にススが付着している。内面は、褐色を基調とした色調を呈する。(10・11) 壺？形土器胴部片 同一

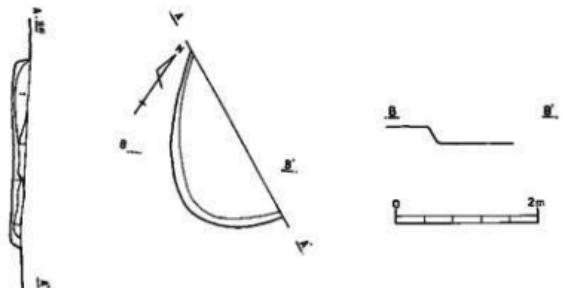


第16図 6号遺構出土遺物拓影

個体である。LR+RL+LRの単節繩文による羽状繩文を施し、段部には繩の押捺が施される。外面無文部と内面は、横方向のヘラ磨きが施される。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が褐色、内面が茶褐色を呈する。(12)壺形土器頸部片 外面無文部は赤彩され、沈線下には燃糸文による羽状繩文が施文される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪く軟質である。色調は、外面が黒褐色、内面が明橙色を呈す。(13)壺形土器胴部片 輪積部には繩が押捺され、無文部を狭み以下付加条繩文が施文されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。外面下半にはスヌの付着がみられる。色調は、外面が黒褐色、内面が褐色を呈する。(14)壺形土器胴部片 付加条繩文が施文されている。内面はナデが施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通である。色調は、外面が暗褐色、内面が橙褐色を呈す。(15)壺形土器胴部片文様は上から、結節文+羽状繩文(LR+RL)+結節文+付加条繩文と構成されている。内面は、ナデが施される。胎土には砂粒を多く含み焼成は良好で硬質である。色調は、外面が黒褐色、内面が淡褐色を呈す。(16~19)壺形土器胴部片 付加条繩文が施文される。

#### 7号遺構 一土塁一 (第14図、図版8) (旧9号遺構)

1区より6号遺構と重複した形で検出する。殆どの部分が6号遺構と切り合っているため、全体像の把握は出来なかったが、直径2m前後の円形を呈するものとなるであろう。深さは、37cmを測る。遺物は弥生後期土器の小片が僅かに出土している。



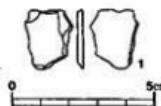
第17図 8号遺構実測図

8号遺構 一住居址一 (第17図) (旧19号遺構)

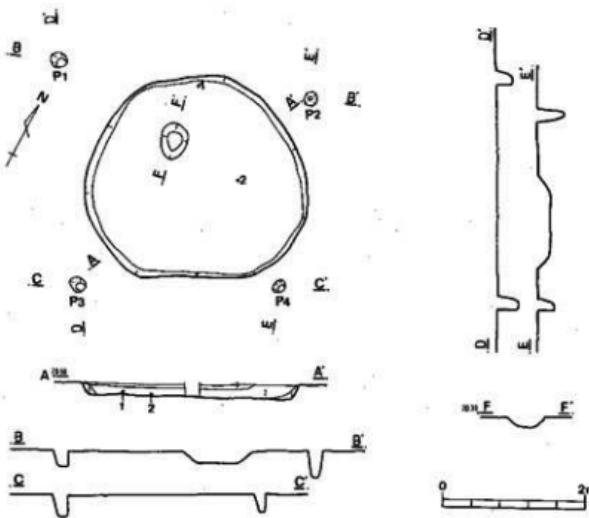
1区西側より検出する。東約9mに5号遺構が存在する。遺構は南側のコーナーを検出しただけであり、殆どは調査区域外となる。形態・規模に関しては、一部分の調査のために判然としないが検出部分より推測すると隅丸の方形になるものと思われる。床はそれ程踏み固められた形跡ではなく軟質であった。調査部分においては、カマド或いは炉・壁溝・柱穴等を検出することはできなかった。覆土は、3層に分層した。1層は、炭化物・焼土粒を点在し、小粒のロームブロックを多く含む褐色土。2層は、小粒のロームブロックを若干含む暗褐色土。3層は、小粒のロームブロックを含む黒褐色土である。遺物は僅少であり、土師器小片と雲母片岩の剥片が1点出土している。

遺物 (第18図、図版12)

(1)雲母片岩製の板状剥片である。研磨痕は見あたらぬが、縁辺を荒く整形しており、石製模造品の未製品かと思われる。



第18図 8号遺構出土遺物実測図



第19図 9号遺構実測図

### 9号遺構 一住居址一 (第19図、図版10) (旧4号遺構)

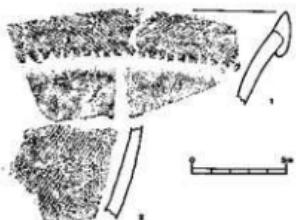
3区より検出する。遺構は、ちょうど床面の深さまでトレンチャーによる擾乱を受けている。形態は、円形を基本とするが、南側に約1.5mの直線部分があり、壁外に存在する柱穴の配置から考え合せると、直線部分が入口になると思われる。規模は、長軸(東西)3.14m、短軸(南北)2.86mと小形のものである。柱穴間距離はP1-P2が3.56m、P2-P4が2.76m、P3-P4が2.82m、P1-P3が3.20mを測る。炉は遺構中央よりやや西にあり、梢円形を呈し、52×38cm、深さ17cmを測る。壁高は約20cmである。床は、よく踏み固められたものであった。柱穴は4個で、壁外にやや台形気味に配置される。P1、円形25×23cm、深さ23cm。P2、円形22×20cm、深さ40cm。P3略円形23×20cm、深さ32cm。P4、略円形21×17cm、深さ28cm。覆土は3層で、1層がしまりのないさらさらとした褐色土、2層が小粒のロームブロックを含み軟質の黒褐色土、3層が2層に酷似するがやや明るい黒褐色土である。遺物の出土は僅少である。

### 遺物 (第20・21図、図版12)

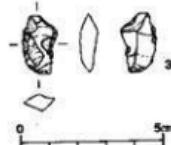
(1)壺形土器口縁部 複合口縁を有し、口縁部には単節繩文による羽状繩文(RL+LR+RL)が施され、その下には繩の押捺が認められる。外面無文部には赤彩が施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成はそれ程良くはなく軟質である。内面は殆ど剥落している。(2)壺形土器胴部片 付加条繩文が施されている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。外面はススの付着、内面は剥落が認められる。(3)刺片 五鍔製で、縁辺に剝離が認められる。

### 10号遺構 一住居址一 (第22図、図版11)

4区中央より検出する。東約4.5mに19号遺構、西約4.5mに11号遺構が存在する。遺構はトレンチャーによる擾乱を大きく受けているが、掘り込みが深いため覆土中位以下は良好な遺存状態であった。本址は北側が調査区域外となるため、遺構全体の把握は出来なかつたが、約1/2を調査

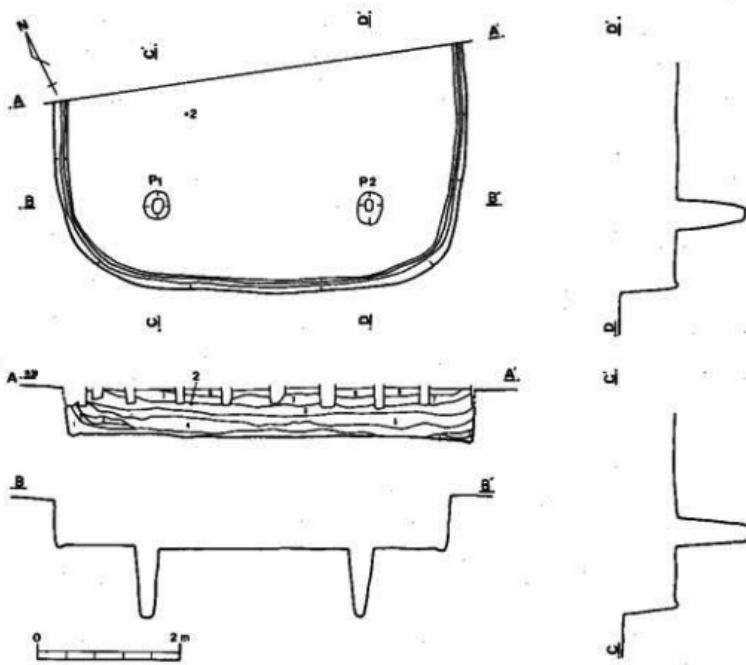


第20図 9号遺構出土遺物拓影



第21図 9号遺構出土遺物実測図

することが出来た。形態は、隅丸長方形を呈すると思われる。規模は、長軸は不明であるが、短軸（東西）は5.83mを測る。壁高は約75cmを測り、垂直に近く立ち上がる。壁溝は幅10~15cm、深さ約5cmを測り、検出部分では全周する。床は、全体に堅めて硬質なものであった。柱穴は、2個検出した。P1、円形40×35cm、深さ102cm。P2、方形45×35cm、深さ96cm。両方とも、しっかりとしたものである。炉は、区域外にあると思われる。覆土は8層に分層した。1層は、直径1mm程のロームブロックを若干含む黒褐色土。2層は、直径1mm程のロームブロックを含む暗褐色土。3層は、2層に酷似するが、暗い色調を示す暗褐色土。4層は、粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを含む黒褐色土。5層から8層は黒色土であり、同じような性質を示すが、色調に僅かな違いがあり分層した。遺物の出土は僅少であるが、6層上部或いは7層下部より、鬼高窓の土師器変形土器が出土している。当初、住居址・土塗等と本址は重複しているのではないかと思われたが、貼床・掘り込みは認められず、ただ単に廃棄されたものと思われる。

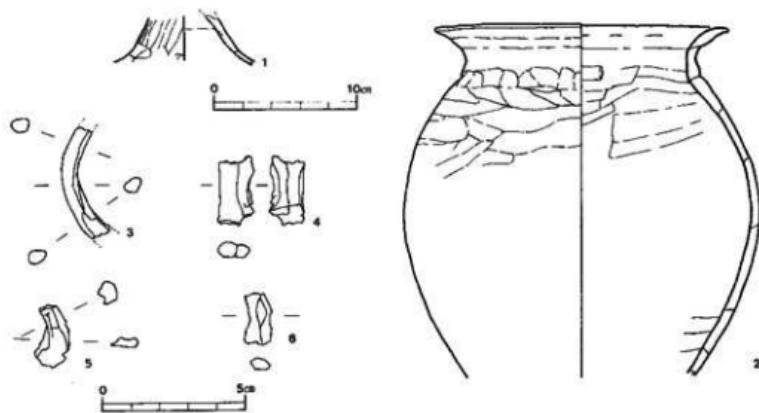


第22図 10号遺構実測図

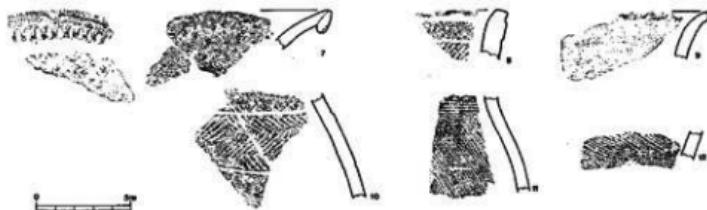
遺物 (第23・24図、図版12)

(1)高環形土器 脚部2/5遺存。残存高3.2cmを測る。外面はヘラナデが施され、全体に赤彩される。内面は横方向のナデがみられ、暗褐色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。

(2)土師器變形土器 底部と胴部下半1/2を欠する。最大径を胴部中位に有し、口縁部は強く外反する。外面は、胴部上半にヘラ削りが弱く残り、下半はナデが施される。口縁部は、内外面共に横ナデが施される。内面はヘラナデがみられ、胴部中位はナデアゲにより仕上げている。焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に茶褐色を呈する。(3～6)紐状を呈する土製品である。焼成されており、硬質である。用途不明。(7)壺形土器口縁部片 複合口縁を有する。外面は、口唇部繩文L Rと口縁部繩文R Lで羽状をなしている。また、ヘラによる刻みが施される。内面は、羽状繩文(L R + R L)とその下に結節文が施される。内外面共に、無文部は赤彩される。胎土には直径1mm程の石英粒を多量に含み、焼成は良好で極めて硬質である。(8)壺形土器口縁部片 口縁部端に太い沈線が巡り、その下に繩文の文様帯を画する沈線が巡る。内面外面無文部



第23図 10号遺構出土遺物実測図

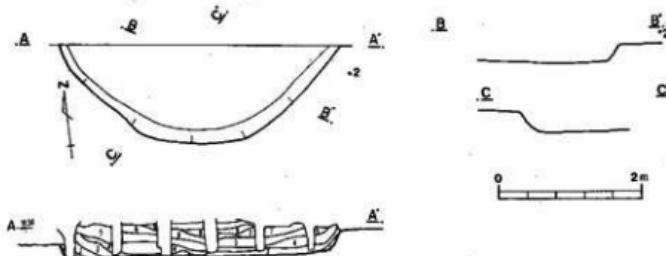


第24図 10号遺構出土遺物拓影

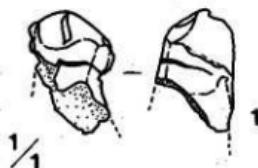
は赤彩される。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。(9)菱形土器口縁部片口唇部は、内外より押捺されている。内外面共に横方向の荒いヘラナデが施され、赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。(10)菱形土器胴部片 沈線によって区画された内に羽状繩文が施文される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良くない。内面は、殆ど剥落する。淡褐色を呈する。(11・12)菱形土器胴部片 同一個体である。(11)は横・斜方向に、(12)は斜方向に刷毛目が施される。内面は、平滑に仕上げられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。五領式土器であろう。

#### 11号遺構 一住居址一 (第25図、図版13)

4区中央より検出する。東約4.5mに10号遺構、西約2mに12号遺構が存在する。遺構は、トレンチャーによる搅乱を大きく受けており、一部は床面にまで達し、遺存状態は悪いものであった。本址は北側が調査区域外となり、遺構は殆どの部分が区域外に含まれる。形態は、隅丸方形或いは円形に近いものであろう。規模は不明である。壁高は、残りの良い部分で約28cmを測る。床はあまり踏み固められた形跡ではなく、軟質である。炉・柱穴等は、調査部分においては検出できなかった。覆土は、9層に分層した。1層は、軟質で粘性に乏しい褐色土。2層は、直径1mm程の



第25図 11号遺構実測図



第26図 11号遺構出土遺物実測図



第27図 11号遺構付近出土遺物拓影

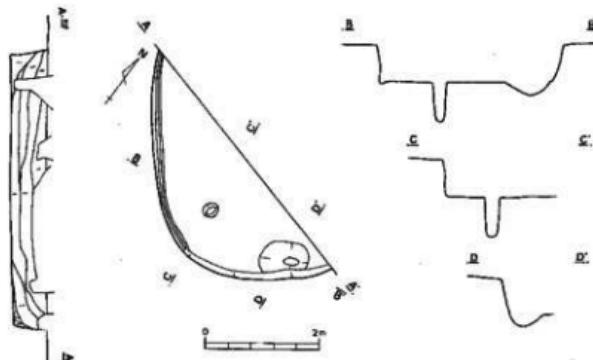
ロームブロックを含む暗褐色土。3層は、2層より暗い色調を示す暗褐色土。4層は、直径1mm程のロームブロックを含む黒褐色土。5層は、しまりがなくさらさらとしている黒色土。6層は、5層と性質は酷似するが、色調が黒褐色を呈する。7～9層は黒色土であり、同じような性質を示すが、色調に僅かな違いがあり分層した。遺物は、縄文中期阿玉台式土器の深鉢形土器口縁部片無文部片が出土している。他に、弥生後期土器の小片を出土しているが、遺物の出土は極めて少ない。また、遺構外からも阿玉台式土器が出土している。

#### ・遺物 (第26・27図、図版13)

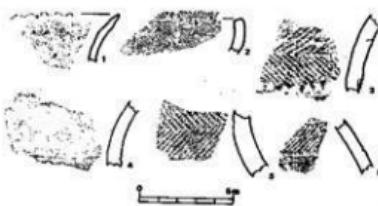
(1) 男性器形土製品 粗雑な作りではあるが、焼成は良好である。(2) 深鉢形土器口縁部片無文であり、段を有する口縁部は外反する。胎土には金雲母・石英粒を多く含み、焼成は良好で極めて硬質である。色調は、内外面共に茶褐色を呈する。阿玉台式土器である。

#### 12号遺構 一住居址一 (第28図、図版14)

4区中央より検出する。東約2mに11号遺構、南約2mに13号遺構が存在する。遺構はトレンチャーやによる擾乱を大きく受けているが、掘り込みが深いため、床面までは擾乱を受けていない。本址は北側が調査区域外となり、調査は全体の1/3程度である。形態は、隅丸長方形を呈する。規模は不明であるが、検出部分より推定すると、長軸(北西—南東)が5m前後、短軸が4m前後になると思われる。壁高は約65cmであり、垂直に近く立ち上がる。壁溝は全周せず、南側のコーナーで途切れる。幅約10cm、深さ約5cmを測る。床は、よく踏み固められた硬質なものであった。柱穴は、コーナーに近接して1個のみ検出した。円形28×25cm、深さ70cmを測る。また、南東壁



第28図 12号遺構実測図



第29図 12号遺構出土遺物拓影

中央より横円形を呈するピットを検出した。87×50cm、深さ22cmを測る。出入口の施設に關係するものと思われる。炉は、区域外に存するであろう。覆土は、7層に分層した。1層は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土。2層は、直径1mm程のロームブロックを含む褐色土。3層は、粘性に乏しくさらさらとしている暗褐色土。4層は、直径2mm程のロームブロックを多く含む暗褐色土。5層は、性質を4層に酷似するが、やや暗い色調を示す暗褐色土。6層は、軟質で粘性に乏しくさらさらとしている黒色土。7層は、性質を6層に酷似し、やや黒味の強い色調を示す黒色土である。遺物の出土は僅少である。

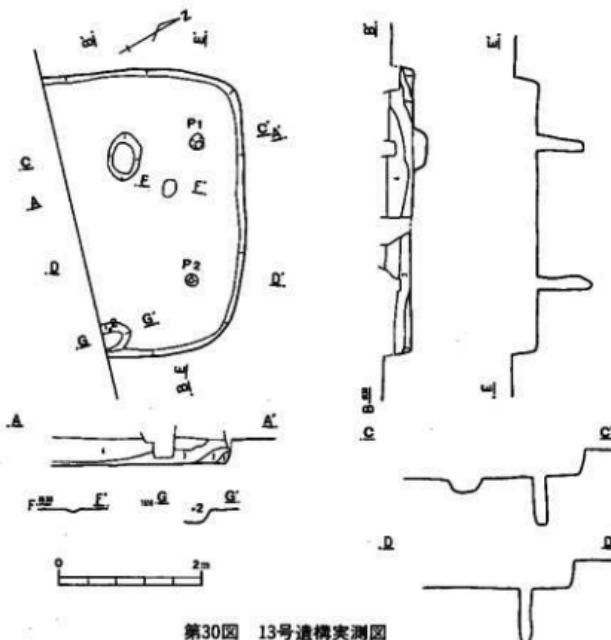
#### 遺物（第29図、図版14）

(1) 瓢形土器口縁部片 口唇部は内側より押捺される。外面はナデ、内面は横方向のヘラナデが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に赤褐色を呈する。(2) 高环？形土器口縁部片 口唇部・口縁部に無節繩文Rが施され、拓影下端には結節文が看取できる。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色調は、外面が暗褐色、内面が褐色を呈する。(3～6) 全て壺形土器であり、頸部から胴部上半にかけてのものである。(3・5)には羽状繩文が施され、(3)はその下に繩の押捺が認められる。(4)は、拓影下端に僅かに結節文を認めることができる。(3)は内面全体に、(4)は外面が沈線より上、内面も外面と同位置に赤彩が施される。

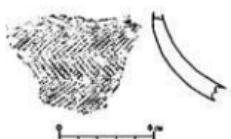
#### 13号遺構 一住居址一（第30図、図版15）

4区中央やや西に検出する。北約2mに12号遺構、西約2mに14号遺構が存在する。遺構は、トレンチャ等による搅乱を大きく受け、一部は床面にまで達し、遺存状態は悪いものであった。本址は南側が調査区域外となるため、遺構全体の把握は出来なかつたが、約3/5を調査することが出来た。形態は、隅丸の正方形に近い方形を呈すると思われる。規模は、東西が4.10m、南北が推定で3.5m前後になるのではないかと思われる。炉は、遺構中央より西壁側に近づいた所に位置

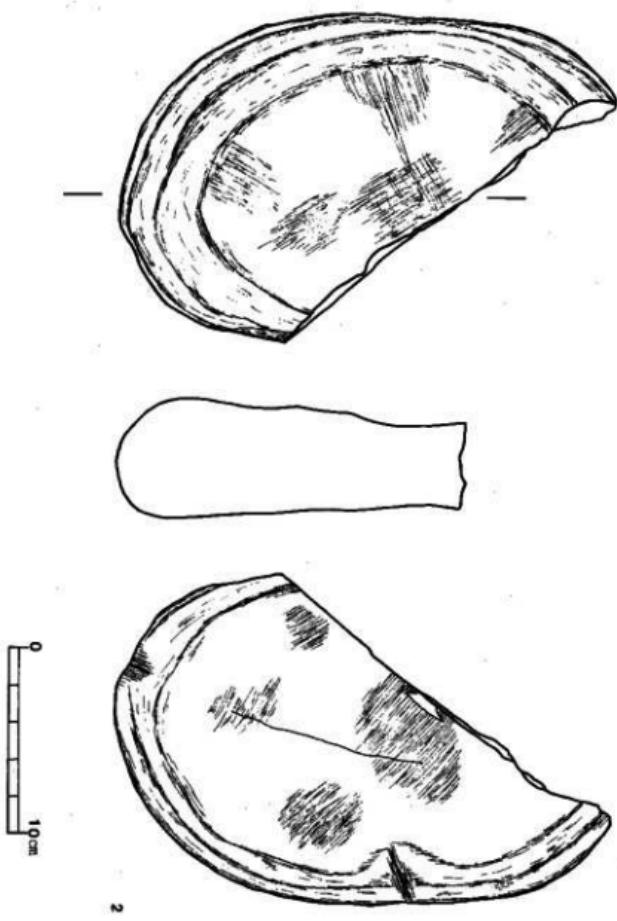
する。梢円形を呈し、 $70 \times 45$ cm、深さ21cmを測る。また、P1とP2の中間に程近く、僅かな凹みではあるが、焼土を充填する箇所があり、これも炉と考えて良いと思われる。壁高は、約38cmを測る。床は炉の周辺が特に硬質であり、よく踏み固められていた。柱穴は、2個検出した。P1、方形 $22 \times 18$ cm、深さ69cm。P2、円形 $17 \times 17$ cm、深さ78cm。また、東壁際よりビットを検出した。深さは20cmを測り、石皿を出土している。覆土は、4層に分層した。1層は、ロームブロックを多く含む暗褐色土。2層は、ロームブロックを含む黒褐色土。3層は、軟質でやや粘性のある暗褐色土。4層は粘性に乏しくさらさらとしている黒色土である。遺物の出土は極めて少ない。



第30図 13号造構実測図



第31図 13号造構出土遺物拓影



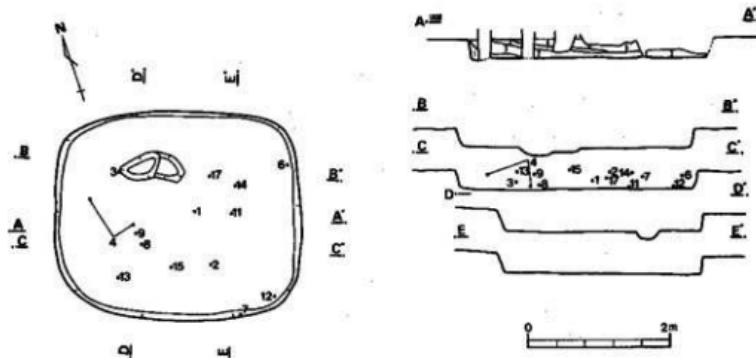
第32図 13号造構出土遺物実測図

### 遺物 (第31・32図)

(1)壺形土器頸部片 結節文2段を遺存し、以下単節縄文による羽状縄文( $L R + R L + L R$ )が施される。内面は、剥落が著しい。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通である。色調は、内外面共に褐色を呈する。(2)石皿 砂岩製。両面を使用している。表面は中央のへこみ以外に、使用による4ヶ所の僅かなへこみがみられる。裏面にもやはり、中央のへこみ以外に使用による3ヶ所の僅かなへこみがみられ、また他に縁辺2ヶ所にU字状を呈する凹みがみられ、砥石としても使用されている。現存する最大幅は17.4cm、最大厚6.5cm、最小厚4.4cm、重量2.95kgを測る。

### 14号遺構 一住居址一 (第33図、図版16)

4区西側より検出する。東約2mに13号遺構、西約6mに15号遺構が存在する。遺構はトレンチャ等による搅乱を大きく受けしており、掘り込みの浅いことも相俟って、遺存状態は非常に悪いものであった。しかし、奇跡的にも遺物はそれ程搅乱の影響を受けておらず、また遺構が小規模な割には遺物量は豊富であった。形態は、隅丸の正方形に近い長方形を呈する。規模は、長軸(東西)3.43m、短軸(南北)2.98mを測り、小形のものである。炉は新旧2つ有り、住居址中央より北西コーナーに向った所に存在する。2つの炉は重複しており、東側の方がより早く使用されたもので西側の方が新しい。新しい炉は、歪んだ情円形を呈し、 $62 \times 36\text{cm}$ 、深さ13cm程度であり、古い炉より深く掘り込まれている。壁高は、約28cm前後である。床は、全体に硬く踏み固められたものであった。柱穴は、住居址内からは検出できなかったため、壁外にその存在を求める精査したが、一辺50cmの正方形をちりばめる格子目状のトレンチャ痕と無数に存在する搅乱によ

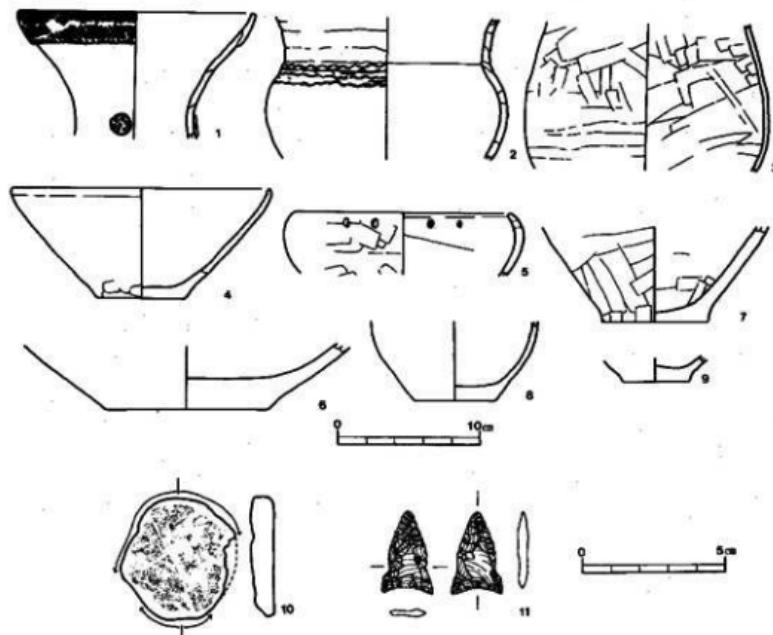


第33図 14号遺構実測図

り、検出することは出来なかった。覆土は、5層に分層した。1層は、ロームブロックを多く含む褐色土。2層は、直径2mm程のロームブロックを多量に含む暗褐色土。3層は、2層に酷似するが僅かに薄い色調を示す暗褐色土。4層は、直径1mm程のロームブロックを多く含む暗褐色土。5層は、焼土を含む暗褐色土である。遺物は、石錐が床着の状態で出土している以外は床面から随分と浮いた状態で出土している。

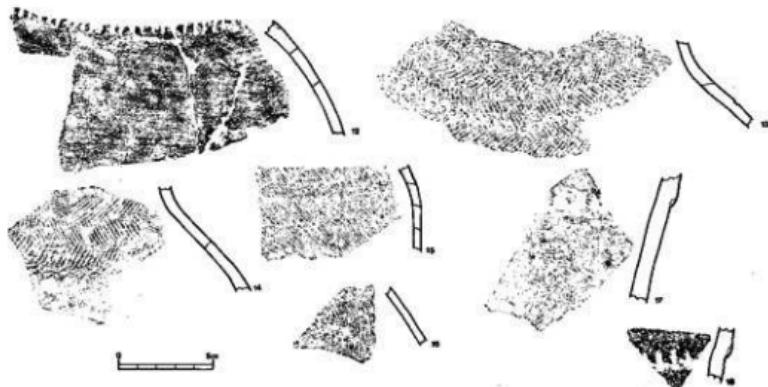
#### 遺物 (第34・35図、図版17)

(1) 壺形土器 口縁部2/5遺存。口径16.4cm。残存高8.8cmを測る。複合口縁を有し、頸部には8個の刺突をもつボタン状の円形浮文1個を存残する。口唇部は縄文LRが施文され、口縁部には羽状縄文(LR+RL)、口縁部下端には縄の押捺が施される。外面は無文部全体に、内面は深さ7.6cmまで赤彩が施される。外面は縱方向のヘラ磨き、内面は横方向のヘラ磨きが施される。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。(2) 壺形土器 胎部1/3遺存。胎部最大径17.0



第34図 14号遺構出土遺物実測図

cm、残存高10.0cmを測る。球形を呈す胴部に、輪積痕を有しやや外反する頸部が連続する。輪積痕は、明瞭に5段認められる。文様は肩部に有し、結節文が5条巡る。以下は、ナデが施される。内面は横方向のヘラナデが施され、褐色から赤褐色を呈する。外面は、黄褐色から赤褐色を呈する。胎土には雲母・石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。(3)壺形土器 胴部1/4遺存。胴部最大径17.1cm、残存高10.4cmを測る。胴部最大径を下半に有し、下脹れ気味である。内外面にヘラナデが施される。外面は上部に班状の剥落が認められ、全面にススを付着している。内面は暗褐色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は普通でやや硬質である。(4)鉢形土器 体部1/5と底部3/5を遺存する。口径18.0cm、底径6.1cm、器高7.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部端は直立する。無文であり、外面体部下端にヘラ削りを認める他は内外面横方向のヘラ磨きが施される。胎土には雲母・石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が茶褐色、内面が褐色を呈する。(5)椭形土器 小片からの復元実測。口径15.2cmを推測し残存高4.4cmを測る。全体的に丸味を持った器形を呈し、口縁部は内彎する。口縁部には焼成前に2個の穿孔が施される。外面はヘラ削りが施され茶褐色を呈し、内面はヘラナデが施され黒褐色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。(6)壺形土器底部 底部完存。底径11.4cm、残存高4.5cmを測る。大形の壺形土器の底部であり、外面はヘラ磨きが施され、全体に赤彩される。内面は剥落が激しい。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は普通で軟質である。東壁際より逆さの状態で出土している。(7)壺形土器底部 胴部下半から底部にかけて1/4遺存。底径7.3cm、残存高6.8cmを測る。内外面にヘラナデが施され、外面は暗褐色、内面は橙褐色を呈す。底部は、粗痕を有する。胎土には雲母・石英粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。(8)壺形土器 底部一部欠失。



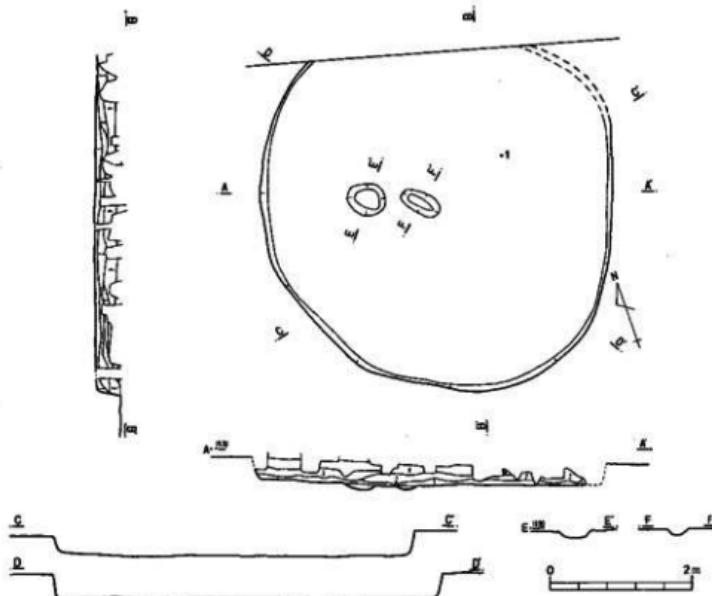
第35図 14号遺構出土遺物拓影

底径5.6cm、残存高5.7cmを測る。胴部は球状を呈すると思われる。外面は縦方向の入念なヘラナデ、内面は外面より雑な横方向のヘラナデが施される。底部は、ヘラ削りで仕上げている。焼成は良好で硬質である。色調は、外面が暗褐色、内面が橙褐色から暗褐色を呈する。(9) 瓢形土器  
底部 底部完存。底径4.6cm、残存高1.8cmを測る。底部は、内面中央がやや高まり、外面は輕痕を有する。焼成は良好で硬質である。色調は、外面が黒色、内面が暗褐色を呈する。(10) 土製円板 底部を使用したもので一部を欠損するが、側面の多くに磨痕を有する。最大長4.3cm、残存最大幅3.7cm、最大幅0.8cmを測る。(11) 石錠 チャート製。最大長2.9cm、最大幅1.8cm、最大厚4mmを測る。両側縁下部に僅かな抉りを有するものである。床面に密着して検出された。(12) 瓢形土器胴部片 外面は横方向のヘラ磨き、繩の押捺が施され、全体に赤彩される。内面は、横方向のヘラナデが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。(13) 瓢形土器胴部片 文様は上から、結節文+羽状繩文( $L R + R L + 竹管刺突文 + L R$ )である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に赤褐色を呈す。(14) 瓢形土器胴部片 文様は上から、結節文+羽状繩文( $L R + R L + L R$ )+結節文二段である。内面は、横方向のヘラナデが施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪い。色調は、内外面とも暗褐色を呈す。(15) 瓢形土器胴部片 付加条繩文が施されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通である。色調は、外面が茶褐色、内面が黒色を呈す。(16) 瓢形土器胴部片 一面に刷毛目が施される。内面は、平滑に仕上げられている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で極めて硬質である。外面にはススが付着しており、内面は暗褐色を呈する。五領式土器か？(17・18)鉢？形土器胴部片 厚手の土器であり、輪積の部分より上に赤彩が施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で極めて硬質である。外面には剥落が見られ、内面は1/2程剥落している。色調は、外面が暗褐色、内面が褐色を呈す。

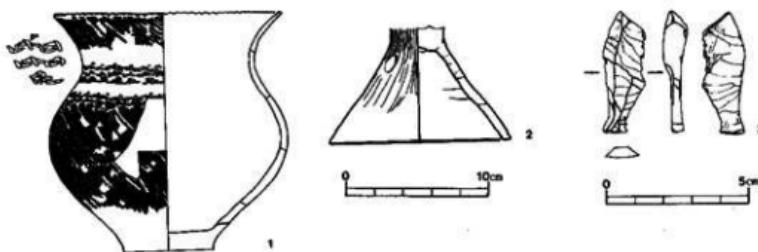
### 15号遺構 一住居址一 (第36図、図版18)

4区西側より検出する。東約6mに14号遺構、西約2mに16号遺構が存在する。遺構は、トレンチャー等による擾乱を大きく受けており、掘り込みの浅いことも相俟って、遺存状態は14号遺構以上に極めて悪いものであり、北東の部分は完全に壁が消失していた。遺構は北側の一部を調査区域外とするが、胎などの部分は調査することが出来た。形態は不整な円形を呈し、東西5.00mを測り、南北は推定で5.2m前後と思われる。炉は2個有り、1つは遺構中央より僅かに西へ向った所に有りもう一つはさらに西へ向った所に有る。前者は橢円形を呈し、 $58 \times 29\text{cm}$ 、深さ9cmを測る。後者は不整な円形を呈し、 $54 \times 45\text{cm}$ 、深さ8cmを測る。床は、炉の周囲に硬質な部分を認めたが、他の部分は軟質なものであった。柱穴は遺構内よりは検出出来ず、壁外に存在を求める精査したが、激しい擾乱のために検出は不可能であった。覆土は、4層に分層した。1層は、軟質

で幾分粘性があり、ロームブロックを多く含む暗褐色土。2層は、軟質で粘性に乏しく直径2mm程のロームブロックを若干含む暗褐色土。3層は、2層に酷似するが暗い色調を示す暗褐色土。4層は、粘性に乏しくさらさらとしている黒褐色土である。遺物の出土は僅少であるが、完形に近い甕形土器が出土している。また、先土器時代の所産と考えられる剝片が出土したため、遺構の南東3mの箇所に2×2mの範囲で試験掘りを行ったが、遺物の出土は皆無であった。



第36図 15号造構実測図



第37図 15号造構出土遺物実測図

### 遺物 (第37図、図版18)

(1) 瓢形土器 部分的に欠失する。口径15.8cm、胴部最大径16.6cm、底径6.2cm、器高17.1cmを測る。底部は厚みのあるもので、胴部は球状を呈し、口縁部は外反する。口唇部は棒状工具により押捺され、口縁部は付加条縄文を施し、頸部には結節文3条、肩部には頸部と同じ結節文3条、以下胴部には付加条縄文が施されており、底部付近は無文となる。尚、頸部結節文は団の中心線より上下が逆転する。内面は、ていねいなナデがみられる。また、団では最大径を胴部に有するが、構図を変えると口縁部に最大径を有する部分もある。胎土には僅かに砂粒を含み、焼成は極めて良好であり硬質である。色調は、外面が茶褐色を基調とし、内面は褐色を呈する。(2) 高环形土器 破片からの復元実測。底径12.8cm、残存高8.2cmを推測する。脚部は直線的に開き、上部に一孔を残存する。外面はヘラ磨きが施され、全体に赤彩される。内面は、ナデが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。内面は暗褐色を呈する。(3) 調整剝片 硅質頁岩製。最大長4.3cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cmを測る。

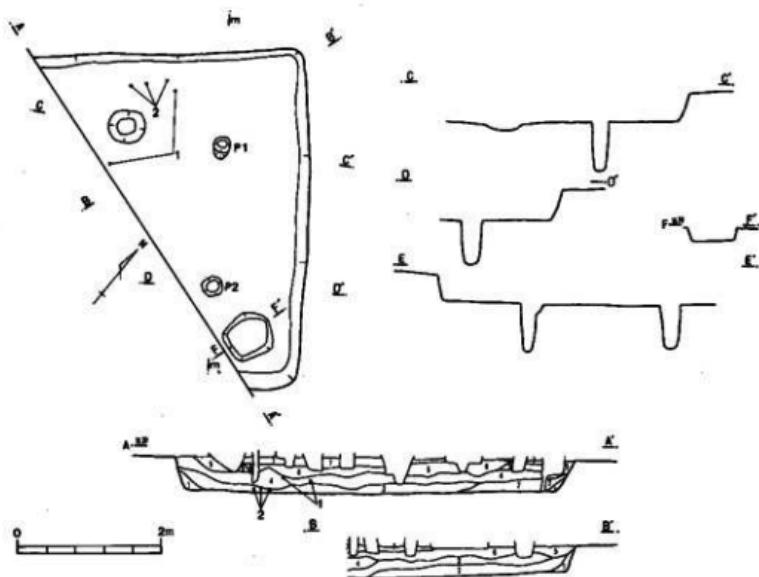
### 16号遺構 一住居址一 (第38図、図版19)

4区に位置し、最西端に検出した遺構である。東約2mに15号遺構が存在する。遺構は、トレンチャーやによる擾乱を大きく受けているが、床面まで達しているものは僅かであった。本址は南側を調査区域外とするため、遺構全体の把握は出来なかつたが、約1/2は調査することが出来た。形態は方形を呈し、おそらく正方形に近い形状を示すと思われる。規模は、北東壁が4.85mを測る。壁高は最高48cmを測る。炉は、北西壁中央と思われる箇所から70cm程離れて検出した。略円形を呈し51×46cm、深さは約10cmである。床は、よく踏み固められた硬質なものであった。柱穴は2個検出した。P1、梢円形33×23cm、深さ70cm。P2、略円形30×29cm、深さ63cmである。また、東コーナーより貯蔵穴と思われる掘り込みを検出した。五角形を呈し、長軸68cm、短軸64cm、深さ20cmを測る。覆土は、7層に分層した。1層は、軟質で幾分粘性があり、直径10mm程のロームブロックを多量に含む暗褐色土。2層は、粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを多量に含む暗褐色土。3～5層は暗褐色土であり、2層に酷似するが、色調を僅かに異とする。6層は、軟質で粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを若干含む黒褐色土。7層は、6層より黒味の強い色調を示す黒褐色土である。遺物の出土は少ないが、縄文中、晩期、弥生後期の土器小片、黒曜石のチップが出土している。

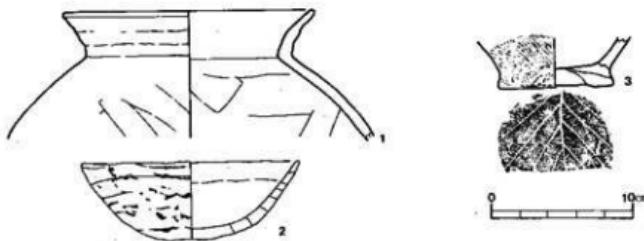
### 遺物 (第39図、図版19)

(1) 瓢形土器 口縁部2/5遺存。口径17.4cm、残存高9.3cmを測る。口縁部は「くの字」形に外反し、胴部は球状を呈するものと思われる。外面胴部はヘラ削りの後にヘラ磨きが施される。口

縁部は指頭によるおさえつけの後に横ナデが施される。内面は、ヘラナデが施される。焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に淡褐色を基調とする。(2)环形土器 略完形。口径15.3cm、器高5.6cmを測る。丸底を呈す。外面は、輪横痕を消さないままに雑なヘラ磨きが施される。内面は、外面とは対照的に整ったヘラ磨きが施される。胎土には砂粒を含み、焼成は普通で軟質である。色調は、内外面共に茶褐色を基調とする。(3)変形土器 底部1/2。底径7.9cm、残存高3.4cm



第38図 16号遺構実測図



第39図 16号遺構出土遺物実測図

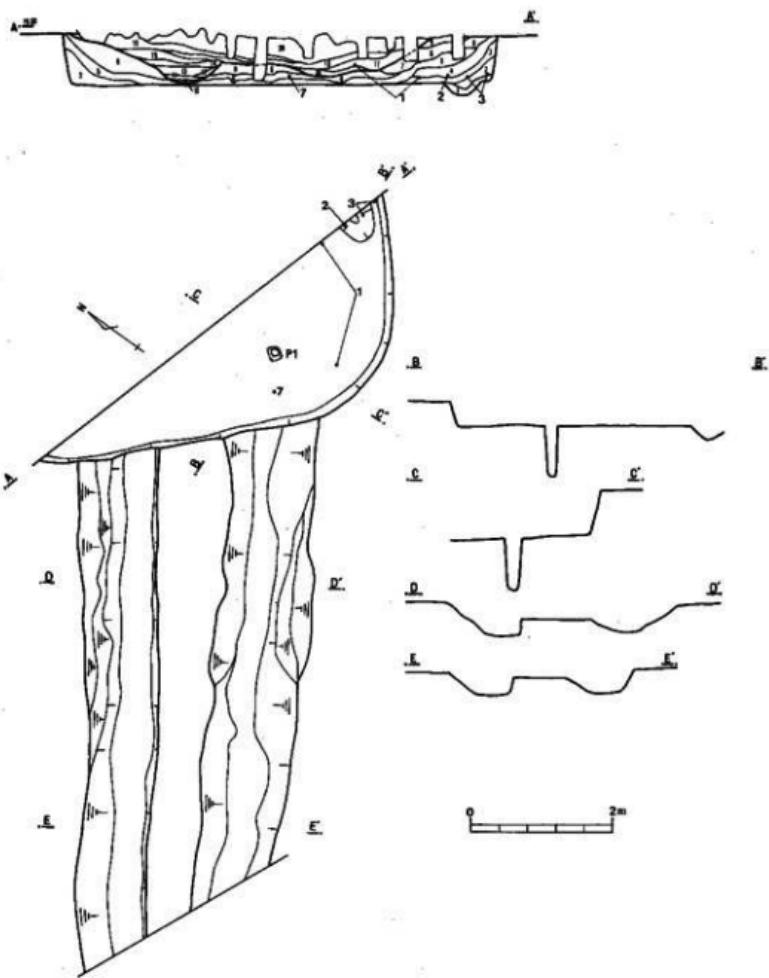
を測る。R L 単節斜繩文が施文される。底部は、木葉痕を有する。内面は、平滑に仕上げられている。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色調は、外面が淡赤褐色、内面が淡褐色を呈する。

### 17号遺構 一住居址一 (第40図、図版20)

4区東側より検出する。18A・B号遺構とは重複関係にあり、本住居の廃絶後に18A・B号は構築されている。本址は北側を調査区域外とするため、調査は全体像の1/3程度である。形態は、隅丸方形を呈すると思われる。規模は、検出部分が少ないため正確な数値は出せないが、おそらく長軸（北西—南東）約6m、短軸（北東—南西）約5.6m程になると思われる。壁高は最高73cmを測り、垂直に近く立ち上がる。床は、全体的によく踏み固められた硬質なものであった。柱穴は、1個のみ検出した。P 1、方形19×16cm、深さ73cmを測る。また、南東壁沿い、区域外に接して、断面ポール状を呈する掘り込みを検出した。深さは、17cmを測る。検出部分においては、炉を確認することはできなかった。覆土は、9層に分層した。1層は、粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを含む黄褐色土。2層は、幾分粘性があり、直径2mm程のロームブロックを多く含む黄褐色土。3層は、大粒のロームブロックを点在する褐色土。4層は、粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを多く含む暗褐色土。5層は、炭化物を若干含む暗褐色土。6層は、5層に酷似するが、炭化物を含まず、色調に僅かの違いが見られる暗褐色土。7層は、粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを含む黒褐色土。8・9層は黒褐色土であり、7層に酷似するが、ロームブロックの混入の違いにより分層した。遺物の出土は、18A・B号の構築により散逸したものも想像でき、少ないのであった。

### 遺物 (第41・42図、図版20)

(1) 壺形土器 口縁部2/5遺存。口径15.7cm、残存高6.9cmを測る。複合口縁を有し、頸部はあまり細くならず、口縁部と緩やかに連続する。口唇部は繩文R L、口縁部は繩文L Rが施され、羽状を構成している。焼成は良好で硬質である。色調は、内外面茶褐色を呈する。(2) 壺形土器 小片からの復元実測。口径14.2cmを推測し、残存高1.9cmを測る。上半部には焼成前に施された小孔が1個残存する。口唇部は、角張ったものとなっている。内外面共にヘラナデ後に全体を赤彩している。焼成は良好で硬質である。(3) 壺形土器 底部1/4遺存。底径7.9cm、残存高3.4cmを測る。無節繩文しが施文され、底部は木葉痕を有する。胎土には砂粒を含み、焼成は普通で軟質である。色調は、外面が淡褐色、内面は剥落している。(4) 壺形土器 底部1/5遺存。底径7.1cm、残存高3.1cmを測る。やや張り出し気味の底部である。付加条繩文が施されており、底部には木葉

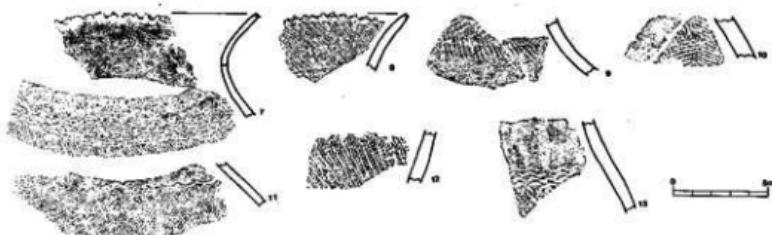


第40図 17、18A・B号遺構実測図

痕を有する。焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に淡橙褐色を呈する。(5)高环形土器  
脚部1/2。残存高6.8cmを測る。外面はヘラ削り、内面はヘラナナが施される。焼成は良好で硬質  
である。色調は、外面が淡褐色、内面が黒色を呈する。和泉期の所産であり、18号遺構中のもの  
と思われる。(7)変形土器口縁部片 口唇部は、内側より棒状工具により押捺される。肩部には  
結節文が巡り、以下付加条縄文が施文されている。内面はナデが施される。胎土には砂粒を含み、  
焼成は悪い。色調は内外面共に茶褐色を呈する。(8)変形土器口縁部片 口唇部は、内側より棒  
状工具により押捺される。口縁部は、付加条縄文が施文されている。内面は、横方向のナデが施  
される。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色調は、内外面共に赤褐色を呈する。(9)変  
形土器肩部片 羽状縄文及び結節文が施文される。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色  
調は、外面が淡橙褐色、内面が淡赤褐色を呈する。(10)変形土器胴部片 沈線による区画内に羽状  
縄文が横に施文される。内面は平滑に仕上げられ、淡灰色を呈する。外面は、無文部に赤彩が施  
される。胎土には荒い砂粒を多く含み、焼成は良好で硬質である。(11)変形土器肩部片 結節文  
及び付加条縄文が施されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪い。色調は、内外面共に暗  
褐色を呈す。(12)変形土器胴部片 付加条縄文が施文されている。胎土には砂粒を含み、焼成は  
良好で硬質である。色調は、外面が褐色、内面が淡茶褐色を呈する。



第41図 17、18A・B号遺構出土遺物実測図



第42図 17、18A・B号遺構出土遺物拓影

### 18A・B号遺構 一溝状遺構一 (第40図、図版21)

4区東側より、17号遺構と重複して検出した。東側をA号、西側をB号とする。両遺構は、17号遺構より後出である。両遺構の中間部はやや削られており、プラン確認時には1遺構と想定したが北東—南西に平走する2条の溝状のものであった。セクションを見ると、両者は同じ時期に機能を失った可能性が強いと思える。断面形態は、A号がやや深めの皿形、B号はA号に近似するがA号側の側壁が直立するものである。深さは、(確認面より) A号が約30~40cm、B号が30~45cmを測る。覆土は、11層に分層した。10層は、硬質で直径2mm程のロームブロックを含む黒褐色土。11層は、極めて硬質で直径2mm程のロームブロックを含む暗褐色土。12層は、軟質で粘性に乏しくさらさらとしている暗褐色土。13層は、硬質で粘性に乏しく、部分的に直径1~2mm程のロームブロックを僅かに含む黒褐色土。14層は、13層よりやや軟質でロームブロックの混入が少ない黒褐色土。15層は、14層よりやや軟質でロームブロックを多く含む暗褐色土。17層は、粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを含む黒褐色土。18~20層は暗褐色土であり、色調に僅かな違いがあり分層した。両遺構共に、底面に堆積する10·11·16層は極めて硬質なものであり、住居の床を想起させる程である。遺物の出土は僅少である。

### 遺物 (第41·42図、図版20)

(6)手捏土器 約1/4遺存。口径6.4cm、底径6.8cmを推測し、器高2.6cmを測る。底部の厚みが器高の7割近くを占める。外面は指頭による押さえつけ、内面はナデが施される。胎土には砂粒を含み焼成は良好で硬質である。色調は、外面が橙褐色、内面が褐色を呈する。(14)變形土器肩部片 結節文と縄文RLが施される。内面は平滑に仕上げられ、僅かな剥落がみられる。焼成は良好で硬質である。色調は、外面が黒色、内面が淡茶褐色を呈す。

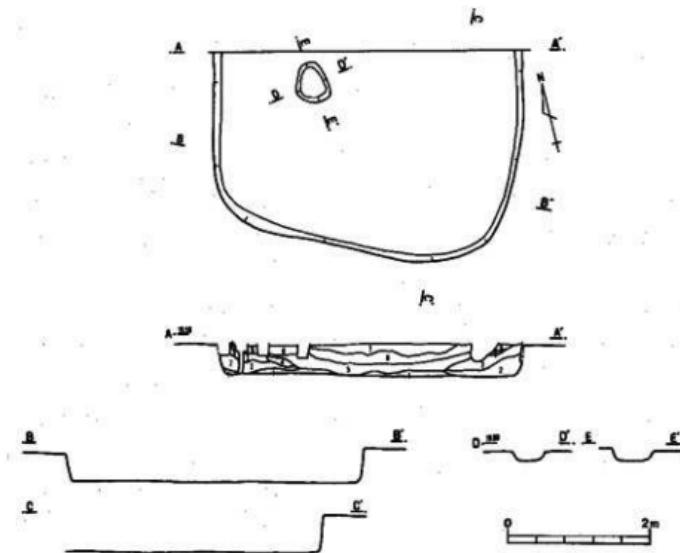
### 19号遺構 一住居址一 (第43図、図版22) (旧7号遺構)

4区東側より検出する。東約5mに17号遺構、西約4.5mに10号遺構が存在する。遺構はトレンチャーによる擾乱を受けており、東・西壁の上部は消失していた。本址は北側を調査区域外とするため、遺構全体の把握は出来なかったが、約1/2を調査することが出来た。形態は隅丸長方形を呈すると思われる。規模は、長軸は不明であるが、短軸(東西)は4.38mを測る。壁高は、最高52cmを測る。炉は、遺構中央と思われる箇所よりやや西に向った所に検出した。形態は不整な梢円形を呈し58×48cm、深さ18cmを測る。床は全体的に硬質なものであった。柱穴は遺構内よりは検出出来なかつたので、壁外を精査したがトレンチャー等の擾乱が激しく検出することはできなかつた。覆土は7層に分層した。1層は、軟質でやや粘性があり、ロームブロックを多く含む黄

褐色土。2層は、軟質で粘性に乏しくさらさらとしている暗褐色土。3層は、2層に酷似するがやや淡い色調を示す暗褐色土。4層は、軟質で粘性に乏しくさらさらとしており、直径1mm程のロームブロックを若干含む黒褐色土。5・6層は、4層に酷似するが色調に僅かな違いのみられる黒褐色土。7層は、軟質でふわふわとしており、直径1mm程のロームブロックを若干含む暗褐色土である。遺物の出土は少ない。

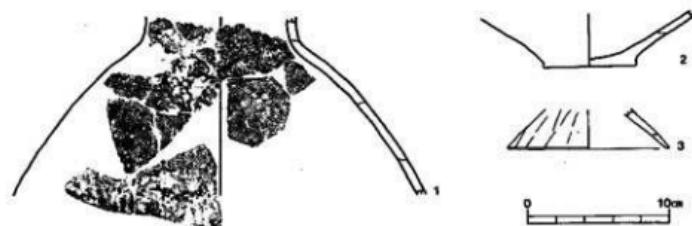
#### 遺物 (第44~46図、図版22)

(1) 壺形土器 敷片からの復元実測。外面は上から、羽状繩文+結節文+無文部赤彩+結節文+羽状繩文+結節文+無文部赤彩と構成される。内面は、深さ1.2cmまで赤彩が施される。胎土には砂粒を含み、焼成は悪く軟質である。(2) 壺形土器 底部2/5遺存。底径6.5cm、残存高3.8cmを測る。外面はヘラナデ、内面はていねいなヘラナデが施される。胎土には小石を多く含み、焼成は良好で硬質である。色調は、外面が淡茶褐色、内面が茶褐色を呈する。(3) 高壺形土器 脚部2/5遺存。底径11.3cm、残存高3.8cmを測る。外面は縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデが施される。胎土には石英粒を多く含み、焼成は普通である。内外面共に剥落が見られ、特に内面

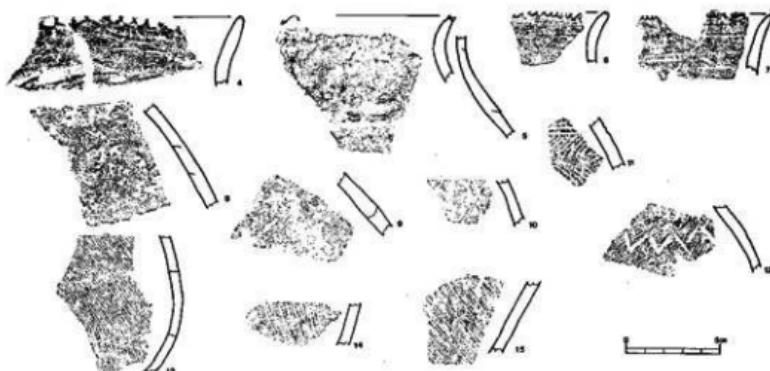


第43図 19号遺構実測図

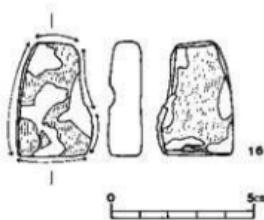
は著しい。色調は、外面が褐色、内面が黄褐色を呈する。(4) 突形土器口縁部片 口唇部は、縄の押捺が施される。外面は荒いへラ削り、内面は平滑に仕上げられている。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は悪く軟質である。色調は、外面が淡橙褐色、内面が明橙褐色を呈する。(5) 突形



第44図 19号遺構出土遺物実測図(1)



第45図 19号遺構出土遺物拓影



第46図 19号遺構出土遺物実測図(2)

土器口縁部片 口唇部は押捺され、肩部に輪積痕を有する。二次焼成を受けており、ボロボロとしている。胎土には砂粒を多く含み、硬度は普通である。色調は、外面が暗赤褐色、内面が茶褐色を呈する。(6) 瓢形土器口縁部片 口唇部は、棒状工具による押捺が施される。外面は横方向の弱い刷毛ナデ、内面は横方向の刷毛ナデが施される。胎土には砂粒を僅かに含み、焼成は良好で硬質である。色調は、内外面共に淡橙褐色を呈す。(7) 瓢形土器口縁部片 口唇部は、繩の押捺が施される。外面は横方向のヘラナデ、内面はナデが施される。胎土には石英粒を多量に含み、焼成は良好で極めて硬質である。色調は、外面が暗褐色、内面が茶褐色を呈する。(8・9) 瓢形土器胴部片 同一個体であり、羽状繩文が施される。(9)は全体に赤彩が施される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪い。内外面共に剥落が著しい。(10) 瓢形土器胴部片 沈線により区画した内に細繩文が施される。一部に赤彩が施される。内面は平滑に仕上げられる。胎土には石英粒を多量に含み焼成は良好で極めて硬質である。色調は、外面が褐色、内面が淡橙褐色を呈する。(11) 瓢形土器胴部片 二条の沈線下に羽状繩文が施文される。胎土には砂粒を多く含み、焼成は悪い。色調は、外面が淡橙褐色、内面は全体に剥落している。(12) 瓢形土器胴部片 結節文及び繩文L Rが施文され、繩文の上には山形文が施される。胎土には石英粒・砂粒を含み、焼成は悪い。色調は、外面が淡橙褐色、内面が淡黄褐色を呈する。内外面共に剥落がみられる。(13~15) 瓢形土器胴部片 付加条繩文が施文される。(14)の外面は、ススが付着している。(16) 砕石 砂岩製 最大長4.0cm、最大幅2.7cm、最大厚1.2cmを測る。全面使用されており、表裏面は破損が著しい。

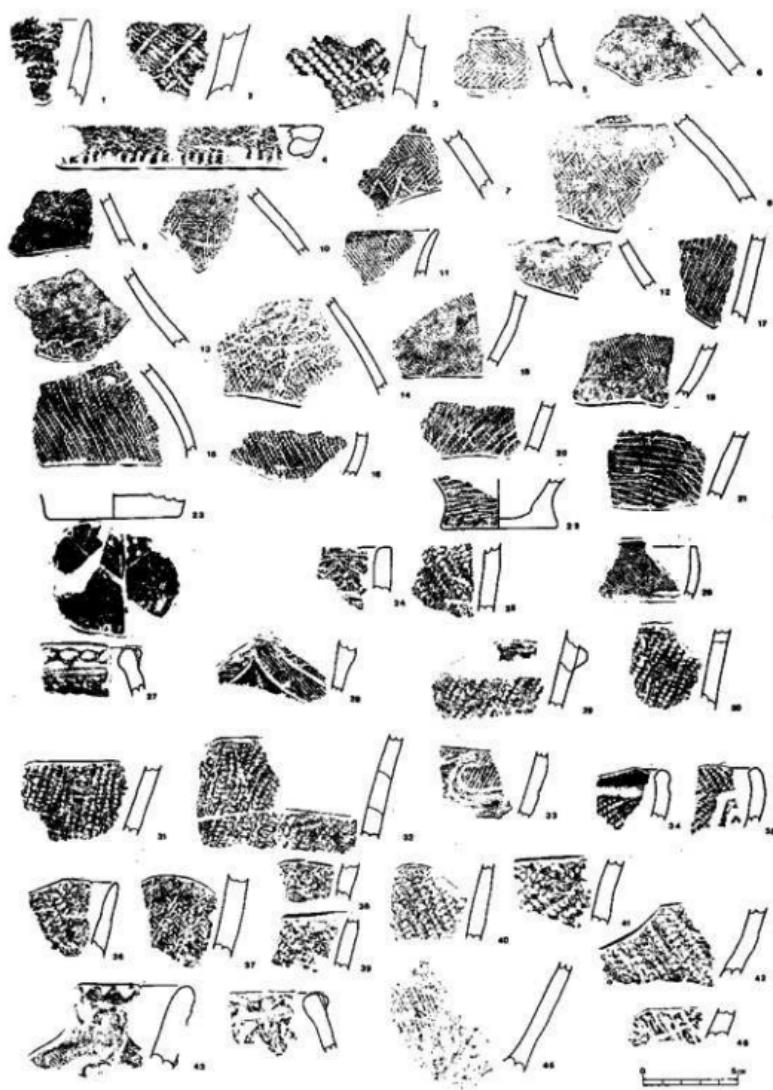
#### その他の遺物 (第47~49図)

不手際により各遺構の項に掲載出来なかった遺物と各区出土の遺物である。

(1~23)は3号遺構出土遺物。(24~25)は5号遺構出土遺物。(26)は11号遺構出土遺物。(27)は12号遺構出土遺物。(28)は15号遺構出土遺物。(29~33)は16号遺構出土遺物。(34~35)は19号遺構出土遺物。(36~45・59)は1区出土遺物。(46)は2区出土遺物。(47~57)は4区出土遺物。58は表採遺物。

(1~3・24・25・36~42・46・47)は、胎土に纖維の混入が認められるものである。(2・46)は、無節繩文Rが施文される。(3)は、羽状繩文が認められる。(37)は、組紐の回転によるものであろう。(24)は、半截竹管による浅い沈線文が認められる。これらの土器は量の差こそあれ調査区全域より出土している。繩文前期黒浜式と思われるが、(37)は関山式かもしれない。

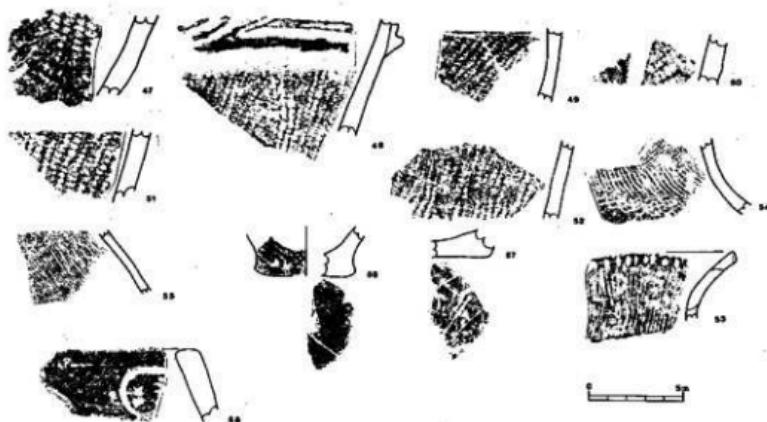
(29~32・48~52)は、繩文中期の土器である。(29~48)は隆帯が認められ、渦巻文を形作ると思われる。(50)は、懸垂文と磨消繩文が認められる。(50)以外は加曾利E I式、(50)は加曾利E II~E III式と思われる。



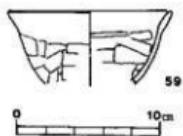
第47図 その他の遺物(1)

(27・28・33・43・44・58)は、縄文晩期に属するものである。(43)は、大波状を呈する深鉢形土器口縁部波頂部片であり、波頂部は魚尾状を呈する。豚鼻状突起は2個存していたようだが1個は剥落し、他の1個は割れ口と共に半欠している。安行IIIa式土器と思われる。他に(28)も同期の所産と思われる。(33)は入組文を有する鉢形土器と思われるもので、(43)に近い時期のものであろう。(58)は沈線による枠状文を有する深鉢形土器口縁部片であり、姥山III式とすることが出来よう。(27・44)は、いわゆる粗製土器であり、口縁部端に貼り付けられた紐線には指頭による連続した押捺が認められる。

(4・23・26・45・54~57)は、弥生後期に属するものである。(4~10・54)は、壺形土器である。(4)は網目状撚糸文が施文され、端部には縄の押捺が認められる。口唇部は、赤彩が施される。(5)は羽状縄文による頸部文様帶を有し、無文部は赤彩される。(6)も無文部は赤彩される。(7・8)は鋸歯状の沈線区画内に羽状縄文が施文されるもので、(8)の無文部は赤彩される。(10)



第48図 その他の遺物(2)



第49図 その他の遺物(3)

は、沈線によって山形に区画された内に羽状縄文の施されるもので、(9・10)の無文部は赤彩される。(54)は羽状縄文と結節文の施される頸部片で、無文部は赤彩される。(11~23・45・55~57)は、變形土器である。(11)は、口縁部と口唇部に付加条縄文が施される。(12)は、結節文と付加条縄文が施される肩部片である。(13~16)は同一個体であり、結節文3条と付加条縄文が施される。(17・18・20・22)は付加条縄文が施され、(22)の底部は木葉痕を磨消している。(19)は単節縄文、(21)は撚糸文が施される。(23)は、木葉痕を有する底部である。(55)は、結節文と付加条縄文が施される。(56・57)は木葉痕を有する底部であり、(56)には縄文が認められる。(26)は高环形土器と思われるものの口縁部片であり、口唇部に縄文、口縁部に羽状縄文が施される。内面は平滑に仕上げられている。

(53・59)は、土師器である。53は口唇部に刻みを有し、外面は縱方向、内面は横方向の刷毛目が認められる。五領式土器であろう。(59)は坪形土器で、団の部分の約1/4を遺存する。口径11.3cm、残存高5.2cmを測る。外面はヘラ削り、内面はヘラナデが施される。

## 住居址一覧表

第1表

	遺構番号	形態	規模 (m)	残存 壁高 (m)	炉位置	柱穴	壁溝	ピット	時期
1	11	隅丸方形或 いは略円形	—	0.28	—	—	—	—	繩文中期 阿玉台期?
2	6	小判形	(9)×—	0.85	—	(1)	—	—	弥生後期
3	9	略円形	3.14×2.86	0.20	中央から やや西	4	—	—	弥生後期
4	10	隅丸長方形	—×5.83	0.75	—	(2)	有	—	弥生後期
5	12	隅丸長方形	(5)×(4)	0.65	—	(1)	有	南東壁 中央	弥生後期
6	13	隅丸長方形	4.10×(3.5)	0.38	中央から やや西	(2)	—	東壁中 央	弥生後期
7	14	隅丸長方形	3.43×2.98	0.28	中央から やや北西	—	—	—	弥生後期
8	15	不整円形	(5.2)×5.00	0.35	中央から やや西	—	—	—	弥生後期
9	17	隅丸方形	(6)×(5.6)	0.73	—	(1)	—	南東壁 中央	弥生後期
10	19	隅丸長方形	—×(4.38)	0.52	中央から やや西	—	—	—	弥生後期
11	3	方 形	6.70×6.65	0.35	中央	4	—	—	古墳時代 和泉期
12	5	方 形	4.60×4.49	0.40	北壁際中央	4	有	東コ一 ナ一	古墳時代 和泉期
13	16	方 形	4.85×—	0.48	北西壁際 中央	(2)	—	東コ一 ナ一	古墳時代 和泉期
14	1	隅丸方形?	—	0.16	—	—	—	—	不明
15	8	隅丸方形?	—	0.22	—	—	—	—	不明

## 第4章 小結

### 遺構

本調査において検出した遺構は、総数19（18A・B号は遺構は1遺構と数えた）であり、内15を住居址が占める。他は、土塗（弥生後期）2、溝状遺構（時期不明）2である。住居址は、断定は出来ないが縄文中期阿玉台期と思われるものが1、弥生後期が9、古墳時代和泉期が3、時期不明が2である。この内、弥生・古墳時代の住居址について整理して検討を行いたいと思う。

### 弥生時代

弥生時代の住居址は9を検出し、全て後期に属するものである。形態は、隅丸長方形或いは隅丸方形を呈するものが6を占める。他には小判形（6号遺構）、略円形（9号遺構）、不整円形（15号遺構）が各1である。これらの住居址からは調査区域との関係から炉を検出出来なかったものがあるが、9住居址中5住居址より炉を検出した。この5の炉は、全て遺構中央よりやや西或いは北西に向った所に存在するという事で共通している。また、住居址内より、壁に沿ってピットを検出したものが3である。これは、南東或いは東に向った壁の中央に存在するという事で共通している。炉とこのピットの両者を検出した遺構は13号遺構であるが、13号遺構中の両者の位置関係は炉が中央からやや西に向った所、ピットが東壁中央と相対した箇所に存在している。このことから壁際中央のピットは出入口の施設に關係するものと考えられる。また、この壁際中央のピットを明らかに有していない住居址がある。それは、9・14・15号遺構であるが、この3住居址に共通している事は掘り込みが浅いという事であり、確認面からの壁高は各々20cm・28cm・35cmである。この3住居址以外を見ると、浅い例は13号遺構の38cm、深い例は6号遺構の85cmである。このことから、当然の事ではあるが、掘り込みの浅い住居は、特別な出入口施設を必要としないとすることが可能、9号遺構の例（住居形態と柱穴配置から出入口を推定できる例）は、この事を積極的に証明していると思われる。しかし、10・19号遺構例のように壁際中央のピットを有しないと思われる住居址もある。これは、ピットを必要としない出入口施設の存在を想定させるが、この他住居址との違いが時間的な差によるものなのか、一時期のバラエティーとして捉えられるのかについては、出土遺物が僅少なため明確には出来なかった。

以上、簡単に検出した弥生時代の住居址について述べたが、これらは全体或いは全体近くを調査出来た9・14・15号遺構を除き、殆ど程度の調査であり、資料としては満足するものではなく、そのため説明も充分に行えなかった。また、弥生後期の住居址として一括して述べてきたが、

検出した9住居址全てが同一時期に存在していたのではない事は明らかである。住居址の形態及び分布を見ても、4区に集中する隅丸長方形の住居址、4区最東に位置する17号遺構から110m以上東に離れて存在し小判形を呈する6号遺構、また同じく17号遺構から70m以上北に離れて存在し略円形を呈する9号遺構などは、数期に渡って集落が営まれていたことを容易に想像せしめるものである。

今回の調査は、基本的には幅4.5mの細長いものであり、集落がどのように展開していったかについては、全く想像がつかず（それどころか、1遺構の全容を明らかに出来たものもほんの僅かである）、今後当遺跡の調査の機会があれば、その折に期待したい問題点である。

#### 古墳時代

検出した住居址は3を数え、いずれも和泉期のものである（3・5・16号遺構）。形態は、全て方形を呈す。規模は、3号遺構のように一辺7m近いものと、5・16号遺構のように一辺5m程のものとに分けられる。この違いは他の部分にも現れ、3号遺構が炉を中心的に有するに対し、5・16号遺構は北壁・北東壁中央に程近い箇所に設けられている。そして、いわゆる貯藏穴が3号遺構には見あたらなく、5・16号遺構では東コーナー付近にその存在が認められる。

以上が古墳時代の住居址の概要であるが、その分布を見ると、それぞれの住居址がかなり離れて位置している。特に16号遺構は、3・5号遺構と150m以上離れている。これは和泉期集落の展開のほんの一端を示し、また遺跡内に当該期の住居址が相当数存在していることを示していると思える。

#### 遺物

本調査において検出した遺物は、1点ではあるが先土器時代の所産と思われる剝片から初まり、縄文時代・弥生時代・古墳時代の各時代に及ぶ。

#### 先土器時代

15号遺構中より出土した剝片1点のみであるが、広範囲に調査を行えば、良好な出土状態で検出する事も充分可能である。

#### 縄文時代

11号遺構より中期阿玉台式土器が出土しており、おそらく当該期の住居址であろう。他には、各遺構及び表土層中より出土しており、前期・中期・晩期の遺物が見られるが量的には僅かなものである。

### 弥生時代

住居址 9、土塙 2 を検出しており、遺物は全て後期のものである。特に 6 号遺構より検出した第15団の（1～5）は全て床面直上の層中より出土したものであり、時期的に同一と捉えてもさしつかえないであろう。中でも（2）の壺形土器は久ヶ原式土器と捉えられるものであり、（1・3）との伴出は注目される。また、14号遺構出土の遺物は、全て器体の $\frac{1}{2}$ 以上を失っており、さらには出土レベルを考え合わせると石礫を除き全て住居廃絶後に投棄されたものと思われ、伴出とするには危険があるが、それ程大きな時間差はないであろう。15号遺構からは、唯一全形を知り得る壺形土器を出土しているが、他の遺物が全て小片の為に共伴関係等を探る事は出来なかった。

### 古墳時代

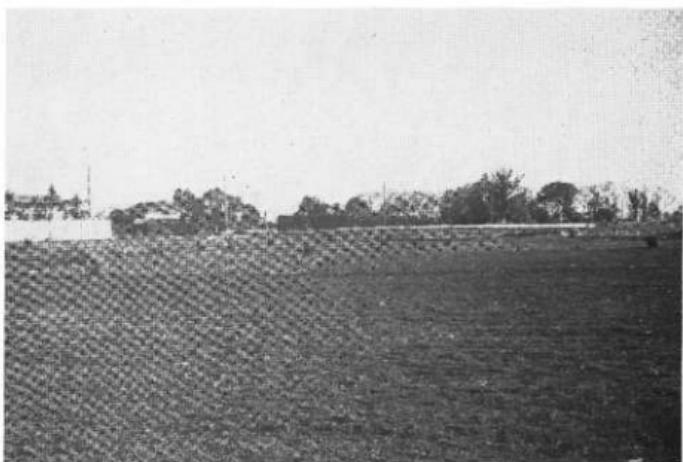
住居址 3 を検出している。遺物は土器の他に、3・5号遺構より石製模造品が出土している。しかし、原石・剥片といったものの出土は両遺構からは 1 点もみず、工房址とは考えられないが、今回の調査は遺跡の一部分だけのものであり、工房址の存在も充分予想できる。

5 号遺構からは全形を覗えるものはないが、高环形土器 7 点が出土した。この内、脚部を残存しているものが 5 点あり、形態分類を行えば大きく 2 分類できる。すなわち、脚部が緩やかな張らみを有し曲線的なもの（4・5・7）と、脚部が直線的なもの（3・6）である。また、3 号遺構の（17）は円柱状を呈しており、前二者とは分類できるものである。

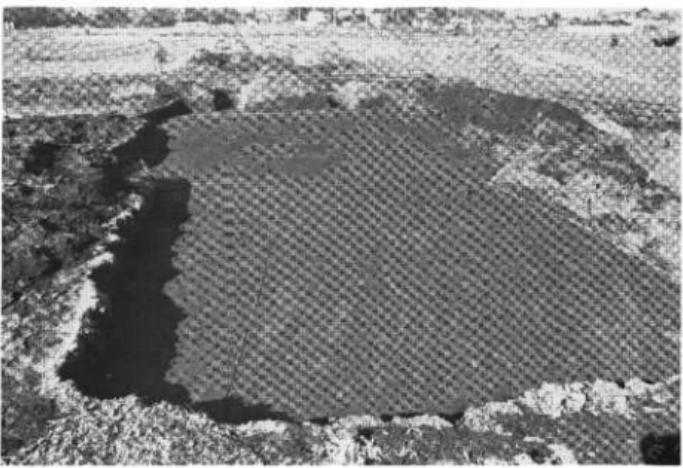
### まとめ

今回の調査では弥生後期の住居址は 9 を検出したが、これらは殆ど遺跡西側の 4 区に認められている。そして遺跡東南部の 2 区には、（今回の調査では）当期の住居址は検出できなかった。しかし、当期の土塙を検出しておらず、住居を構築する場とは違った意味で使用していたとも考えられる。とにかく、今回の調査のように、狭く限定された内での調査では全てが推測の域を出す、今後当遺跡を全面的に調査する機会があれば、その時に個々の問題点について解明を願う次第である。

# 図 版

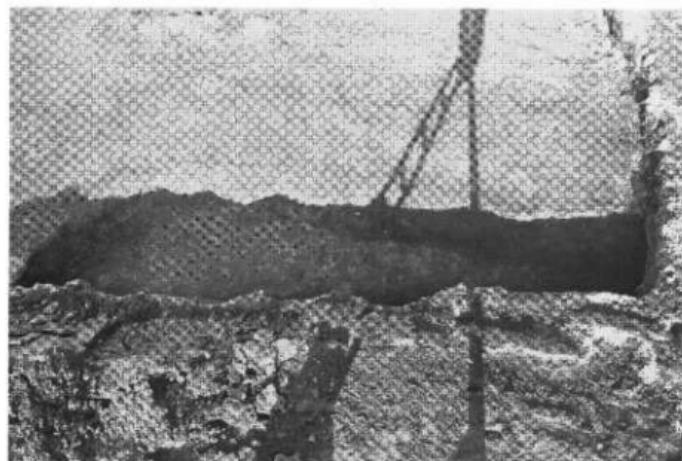


調査前近景

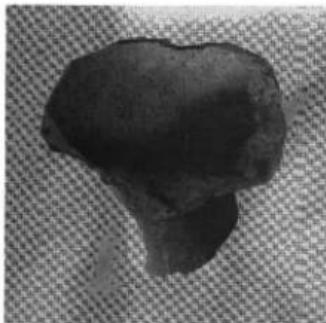
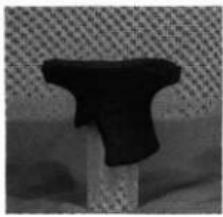


2区遺構確認状況

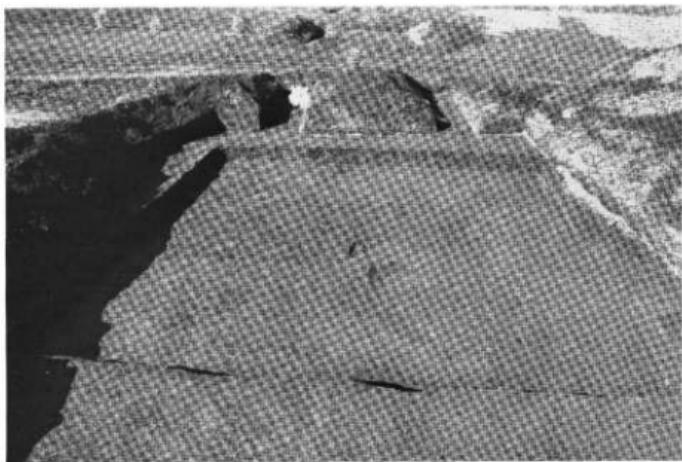
図版  
2



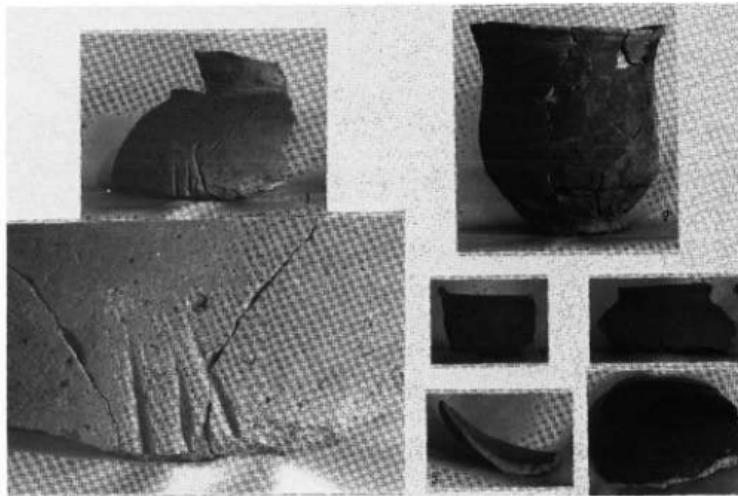
1・2号遺構



2号遺構出土遺物

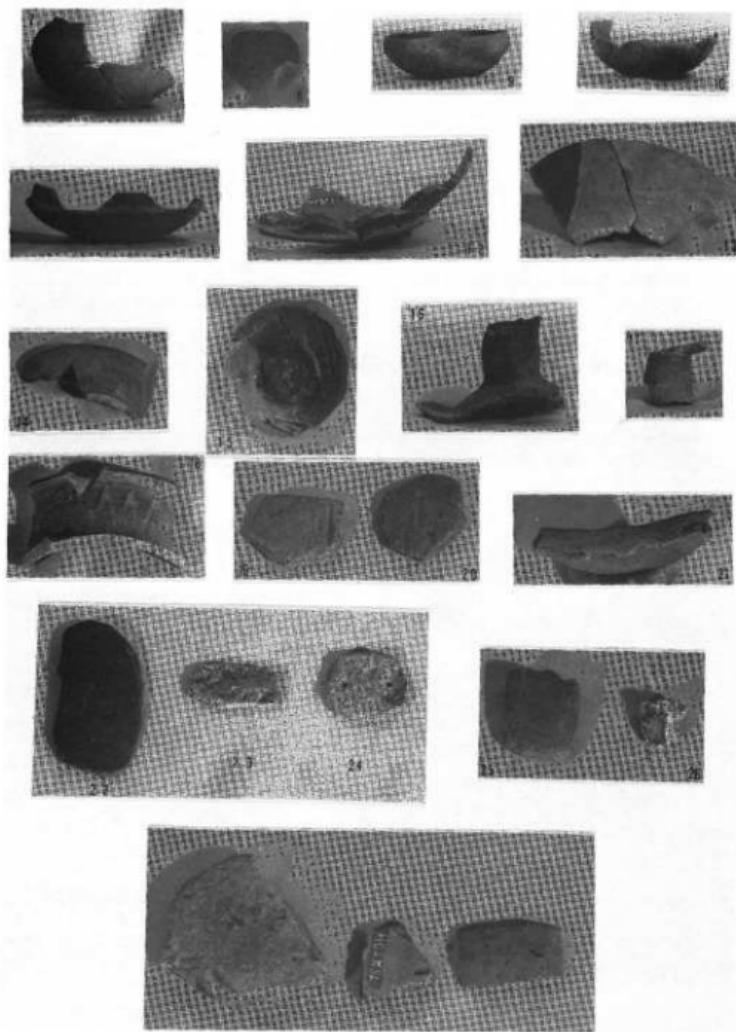


3号遺構

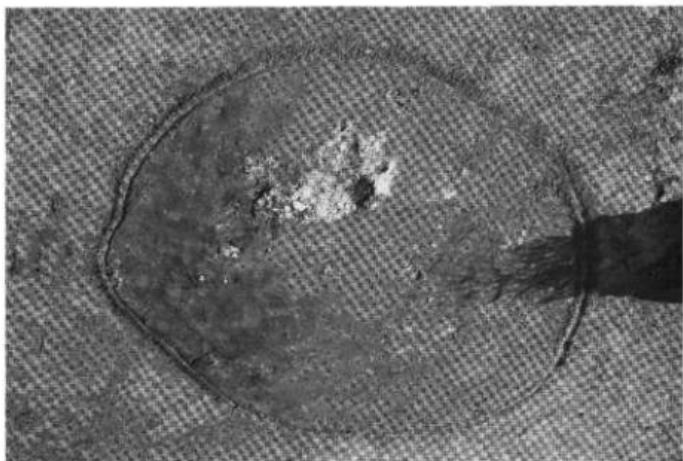


3号遺構出土遺物(1)

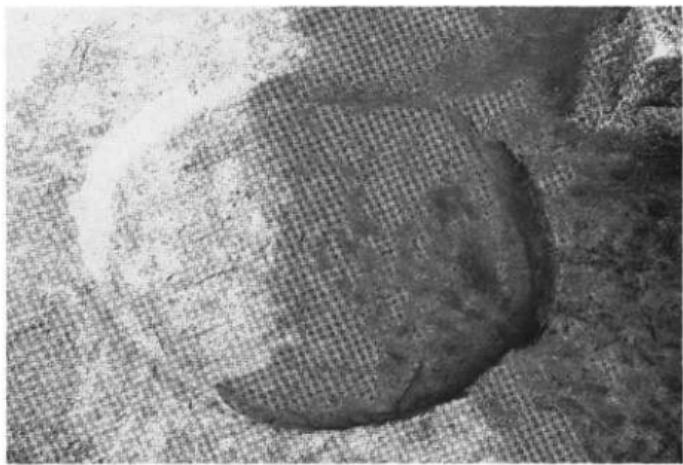
図版4



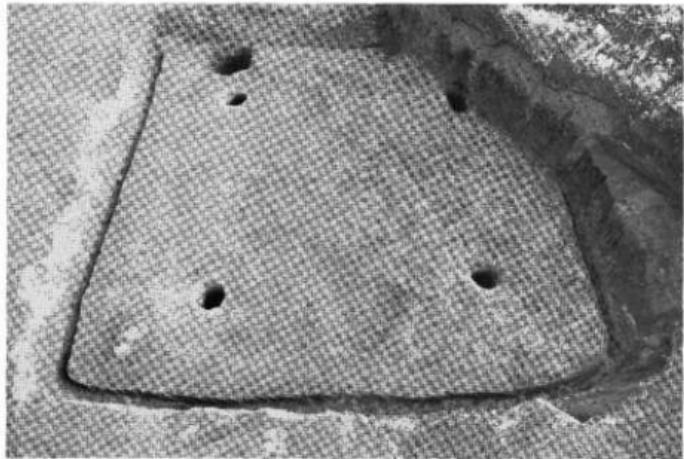
3号遺構出土遺物(2)



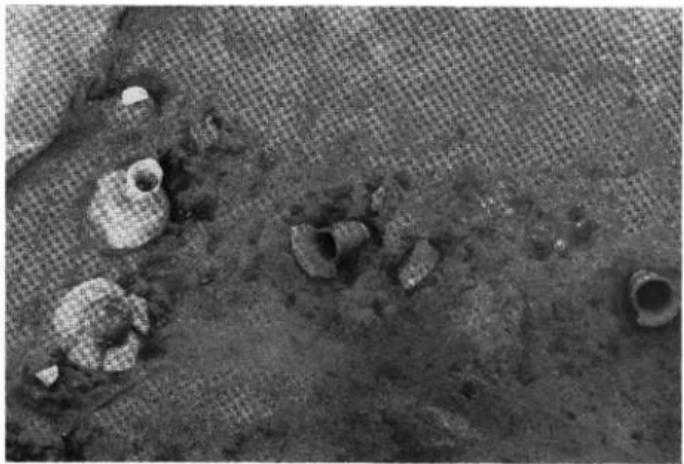
4号遺構確認状況



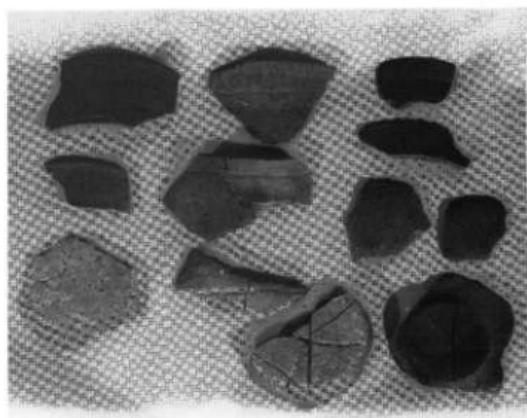
4号遺構



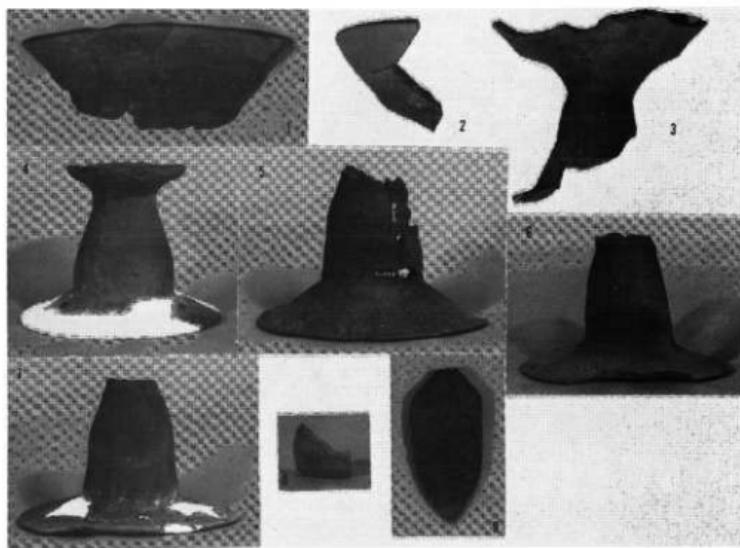
5号遺構



5号遺構遺物出土状況

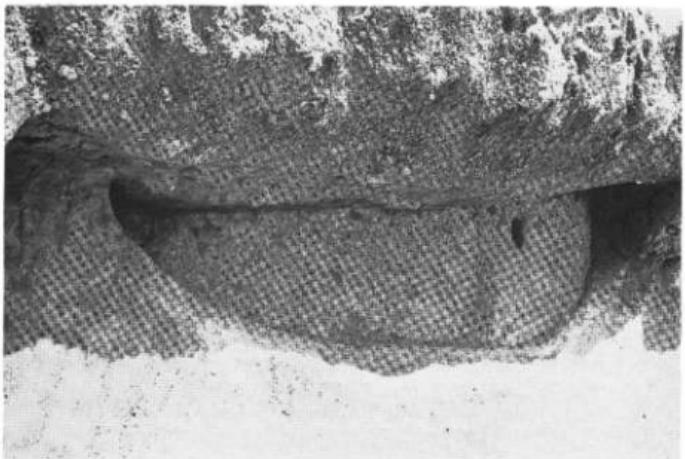


4号遺構出土遺物



5号遺構出土遺物

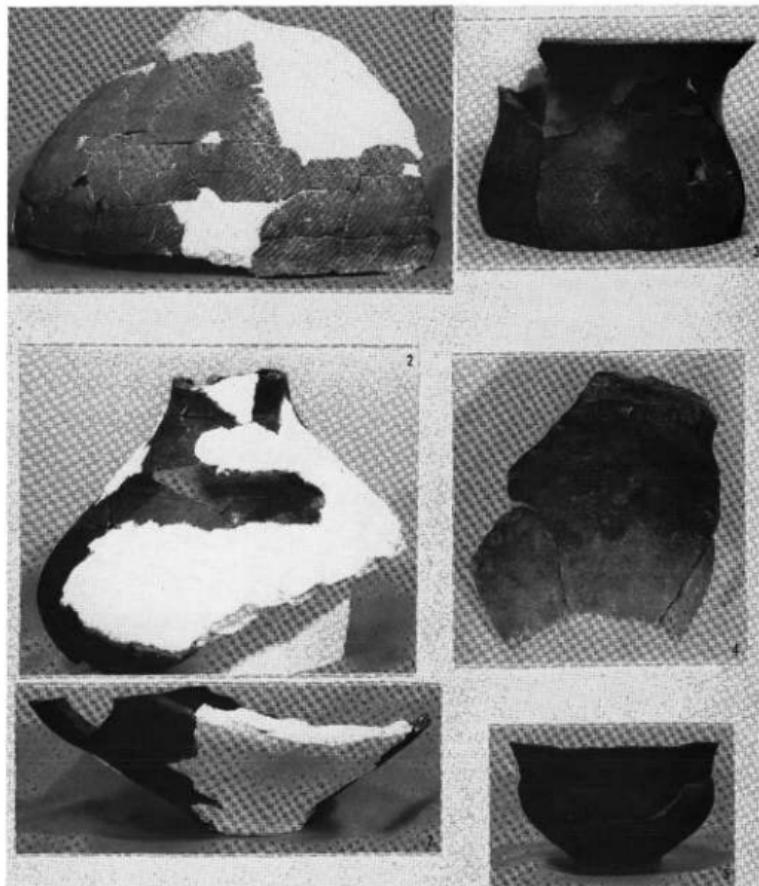
図版  
8



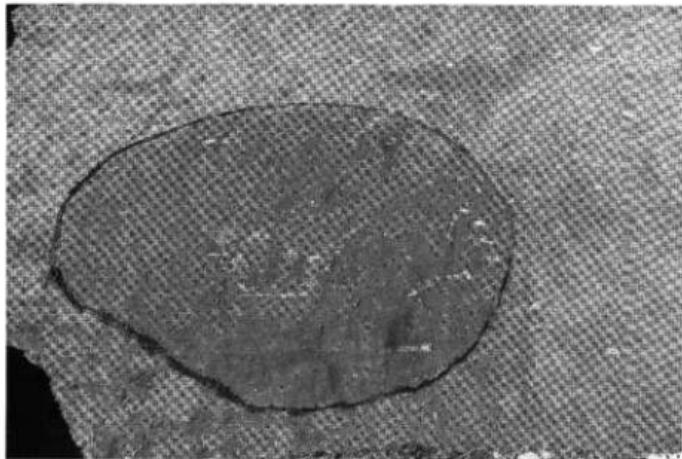
6・7号遺構



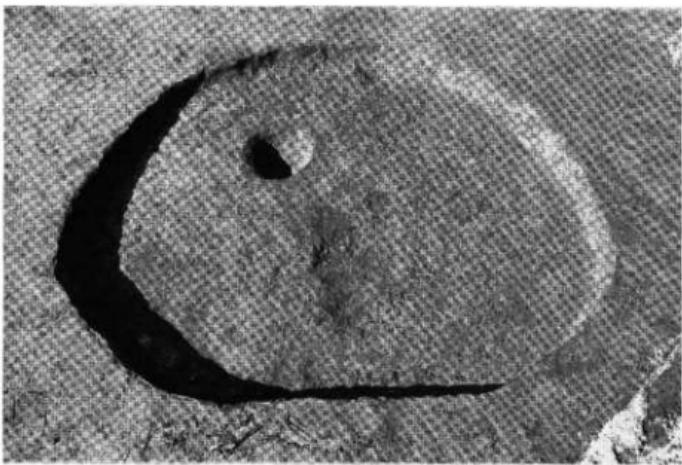
6号遺構遺物出土状況



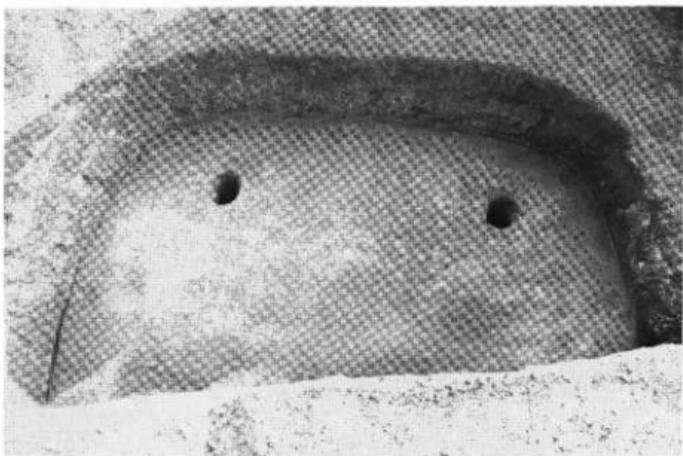
6号遺構出土遺物



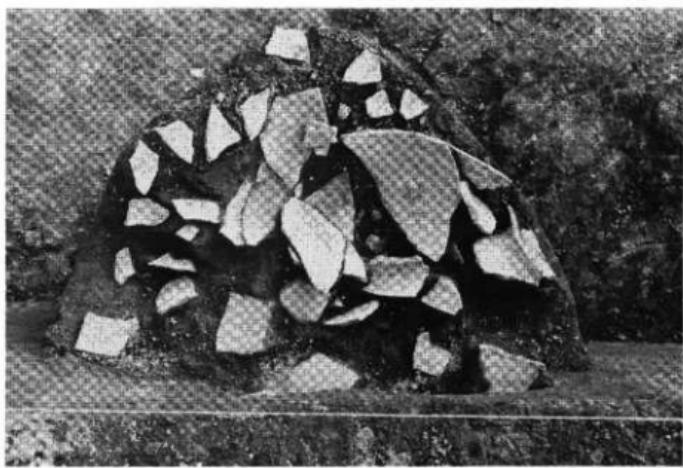
9号遺構確認状況



9号遺構



10号遺構

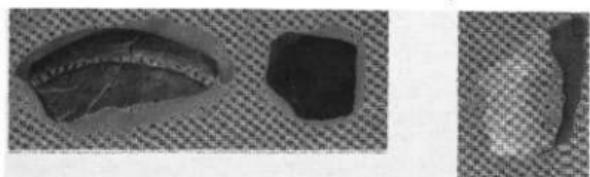


10号遺構遺物出土状況

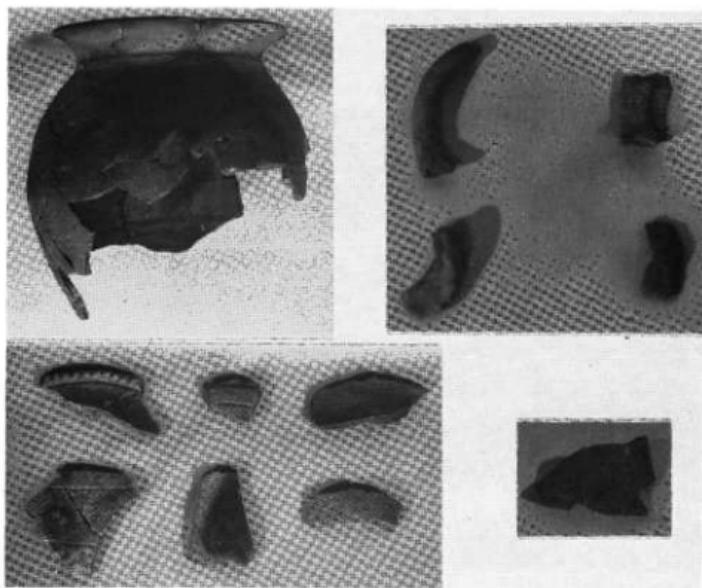
図  
版  
12



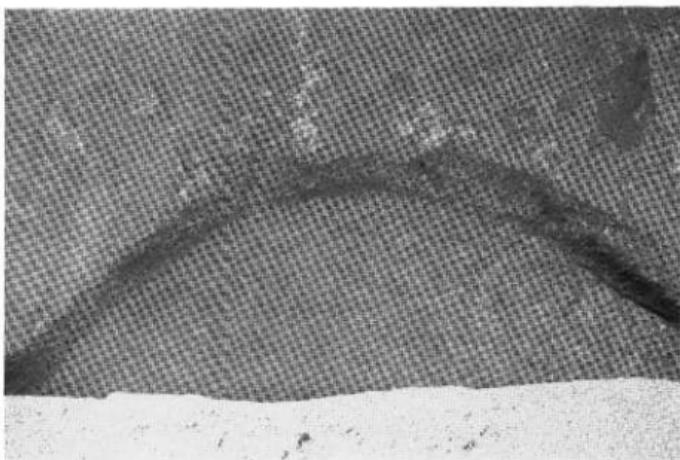
8号遺構出土遺物



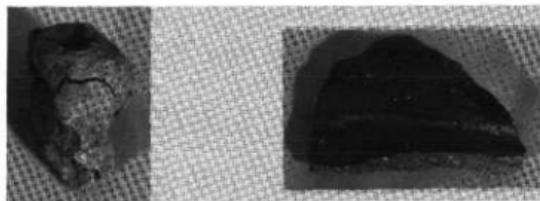
9号遺構出土遺物



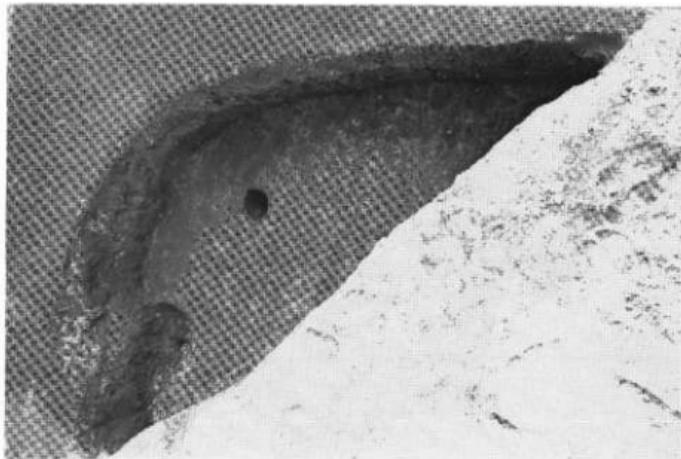
10号遺構出土遺物



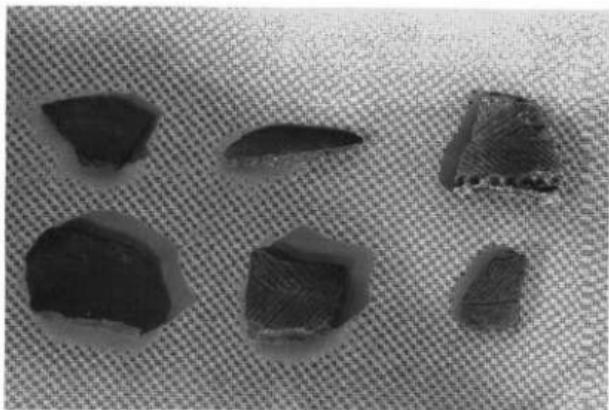
11号遺構



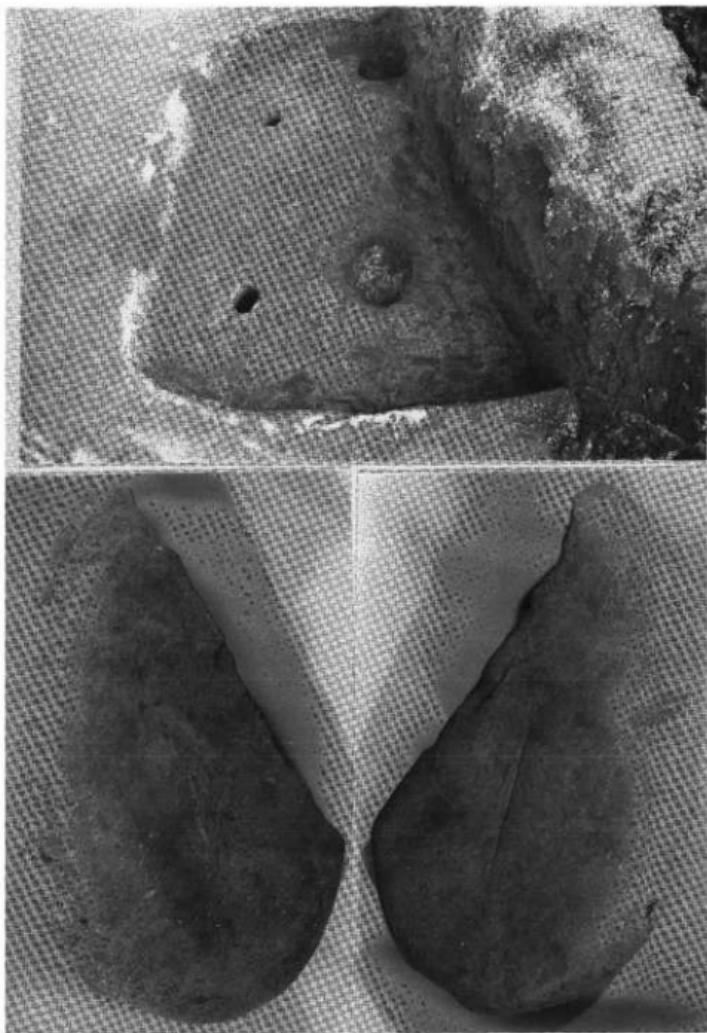
11号遺構出土遺物



12号遺構



12号遺構出土遺物

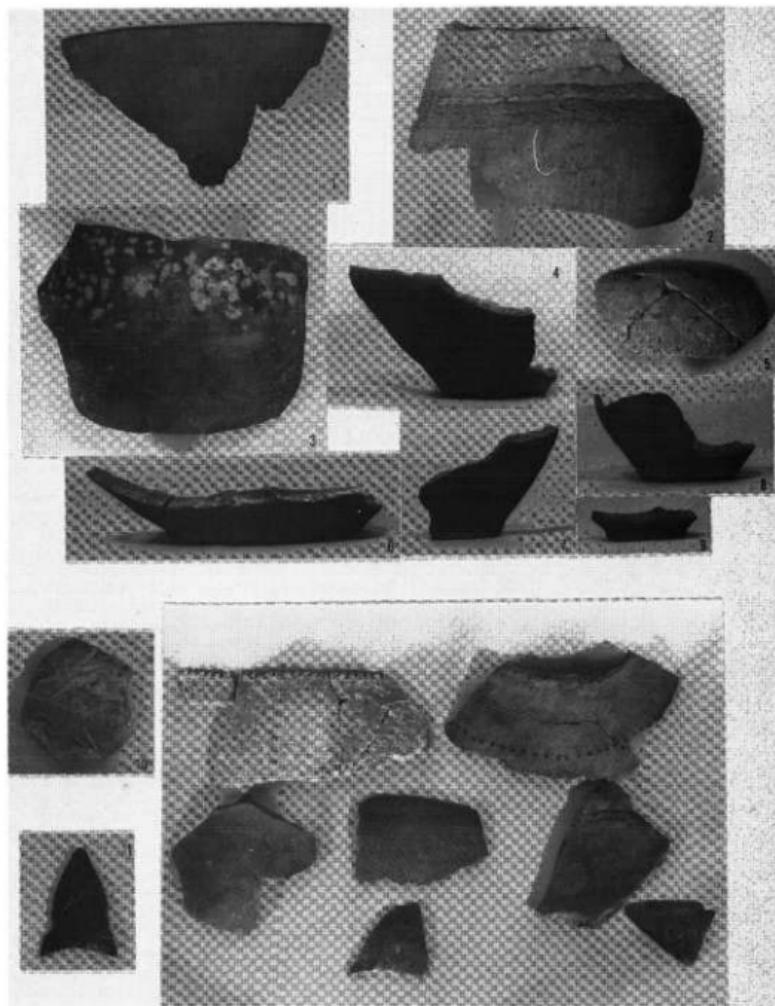


13号遺構

13号遺構出土遺物



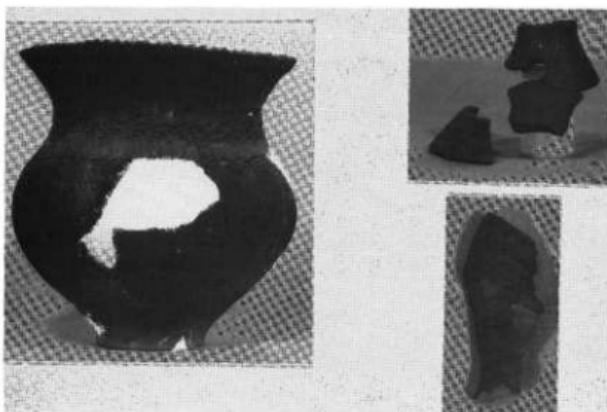
14号遺構



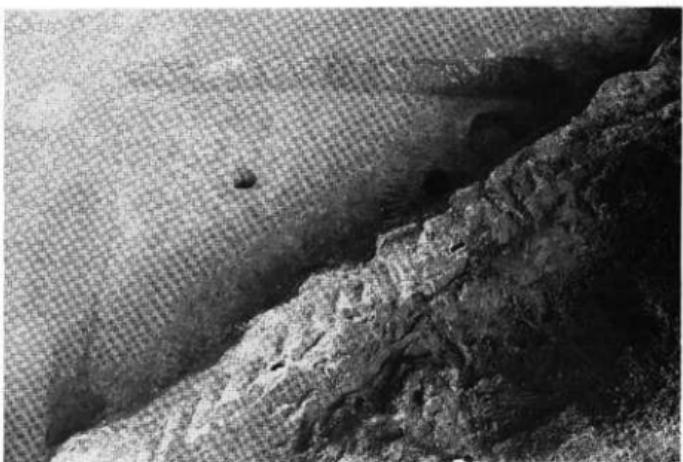
14号遺構出土遺物



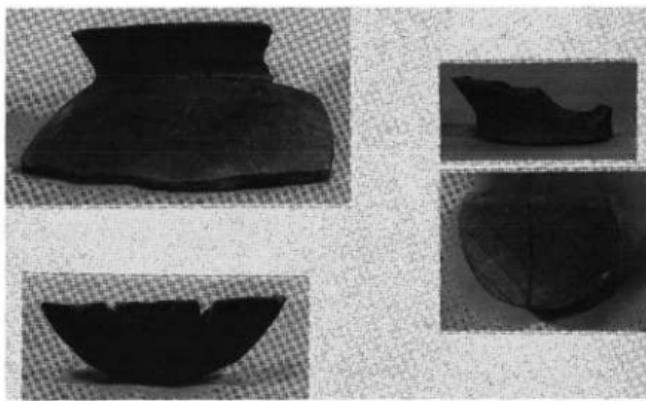
15号遺構



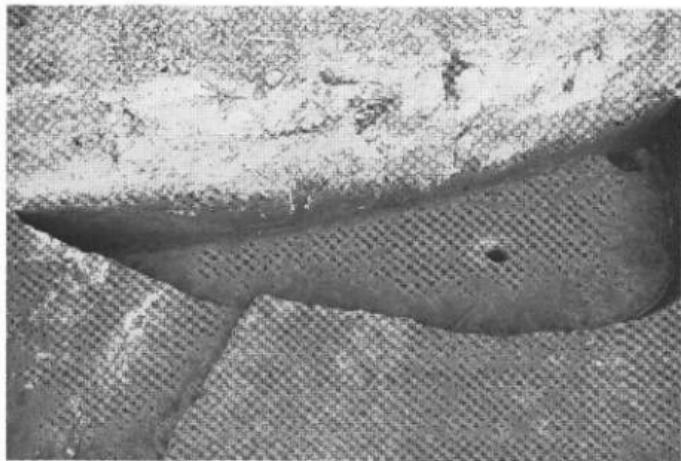
15号遺構出土遺物



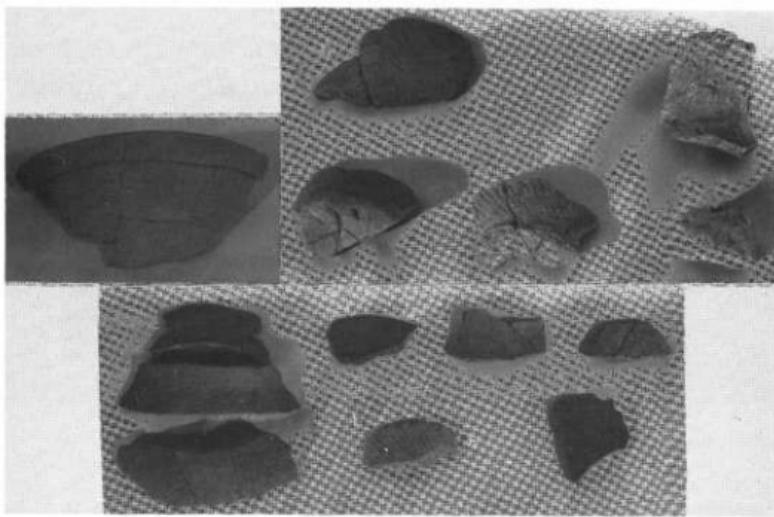
16号遺構



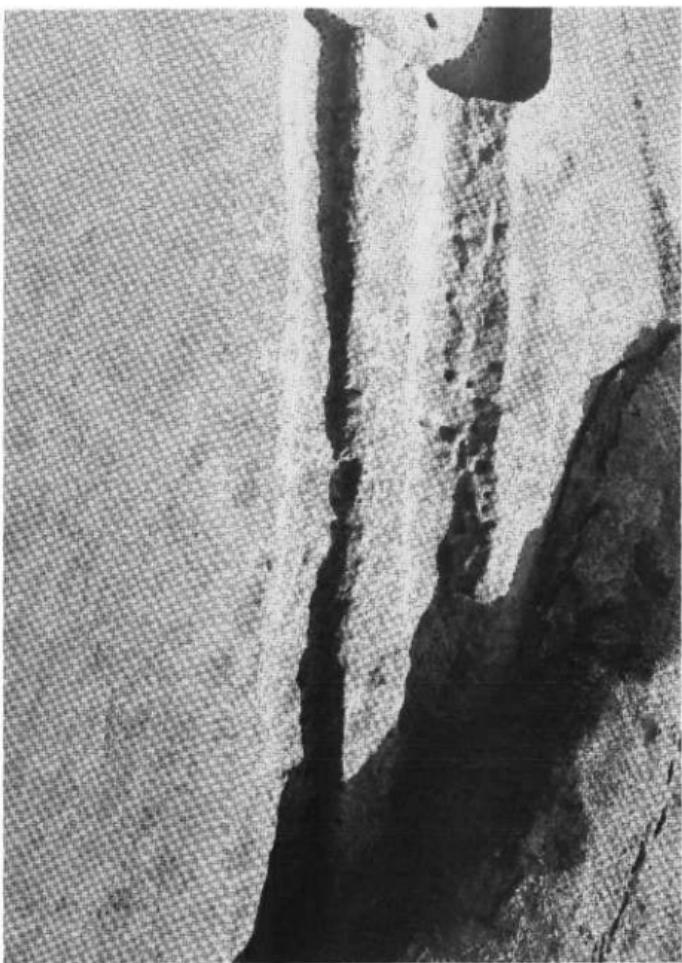
16号遺構出土遺物



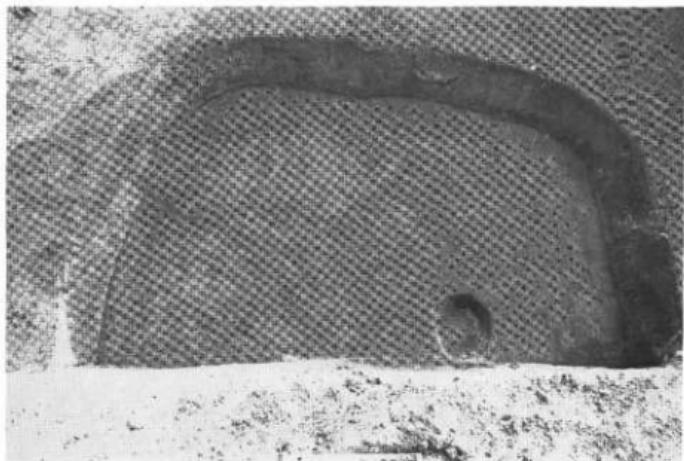
17号遺構



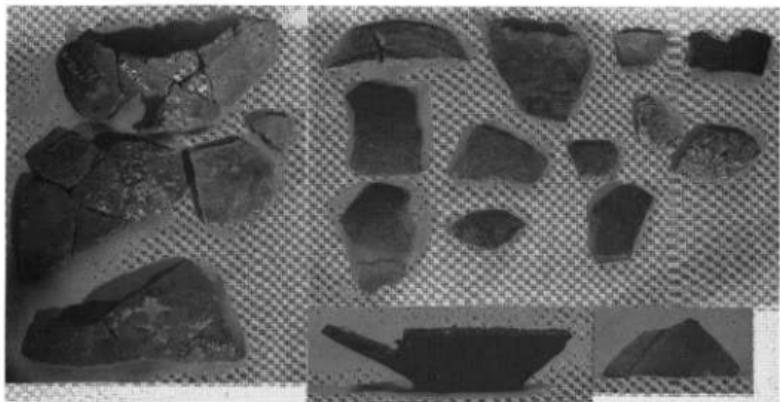
17、18A・B号遺構出土遺物



18A・B号遺構



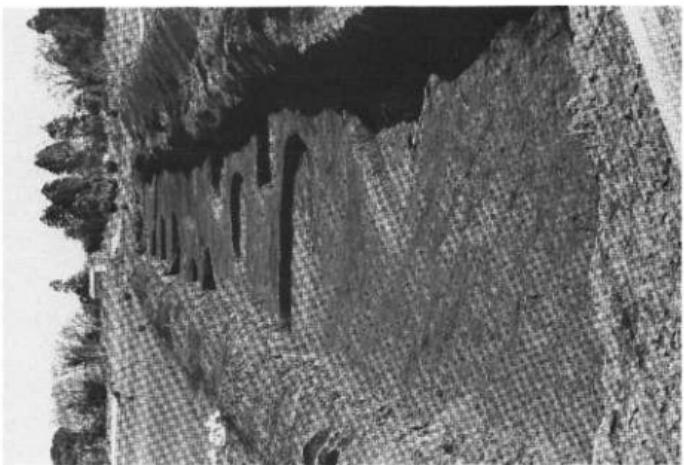
19号遺構



19号遺構出土遺物



4区全景（東より）



4区全景（西より）

---

平戸道地遺跡

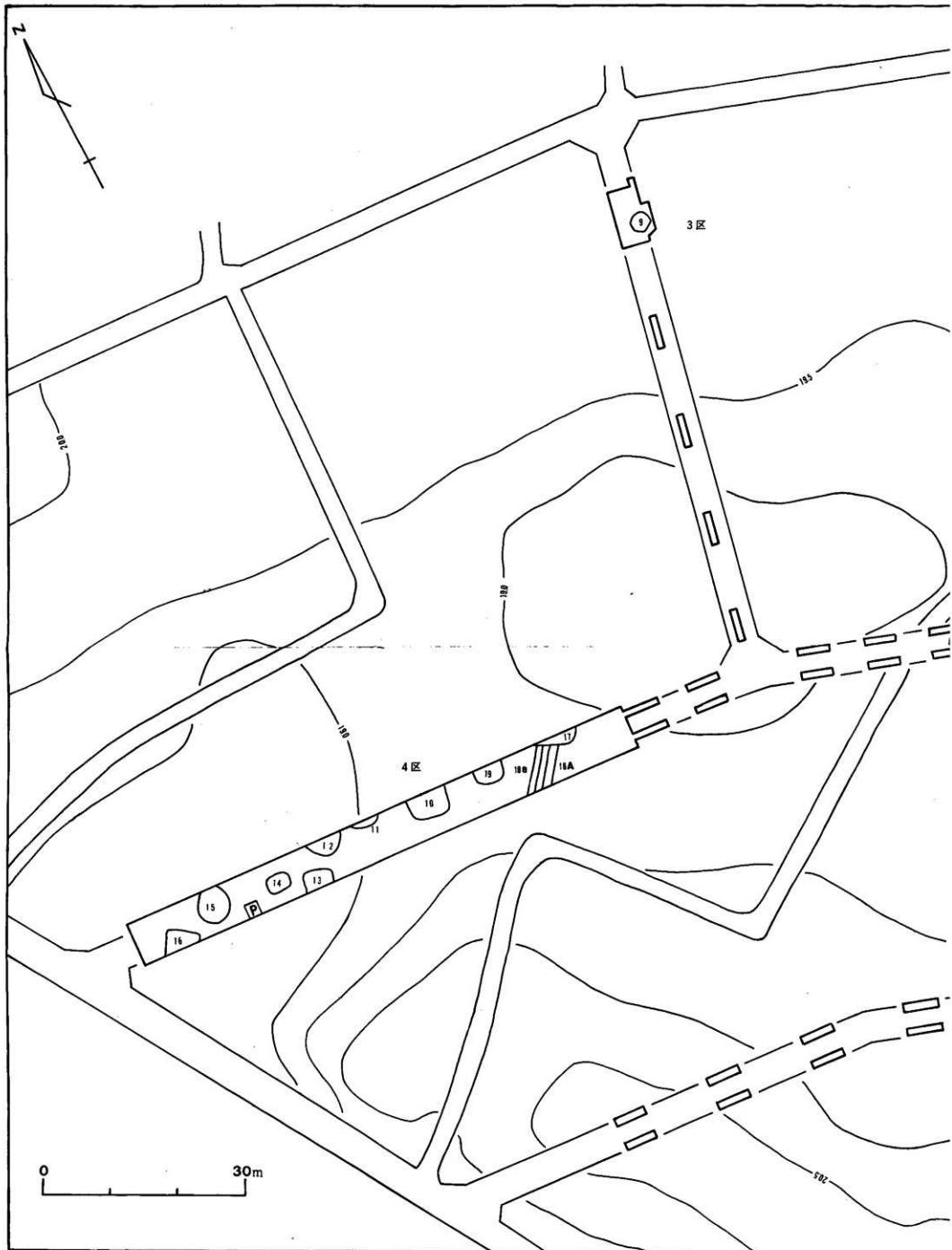
印刷日 昭和61年3月20日

発行日 昭和61年3月31日

発行者 八千代市教育委員会

印刷所 リビング・シービーアール

---



第1図 平戸道地遺跡全図



首地遺跡全測図